

日 本 独 文 学 会 研 究 叢 書 131

# ドイツ語の場面レベルと個体レベルの表現タイプ

宮下 博幸 編

日本独文学会

*Studienreihe der Japanischen Gesellschaft für Germanistik 131*

# **Stage-level- vs. individual-level-Typen im Deutschen**

Herausgegeben  
von  
Hiroyuki MIYASHITA

JGG Tokyo

## 目次

宮下 博幸・小川 暁夫 はじめに .....	1
宮下 博幸 場面レベル述語・個体レベル述語とは何か .....	3
坂賀 翠・小川 暁夫 人を表す名詞の表現形式 ——場面レベルと個体レベル—— .....	13
和田 資康 不変化詞動詞に現れる個体レベル的特徴 .....	27
段上 佳代 <i>be</i> -動詞における意味機能の個体レベル化 .....	35
井口 真一 与格名詞句による形容詞構文の場面レベル化 .....	51
武田 有里子・宮下 博幸 <i>werden</i> 受動の可否と述語の特性 ——場面レベルと個体レベル—— .....	63
宮下 博幸 シンポジウムの議論の内容とその成果 .....	79

## はじめに

本叢書は2017年日本独文学会春季研究発表会における、本叢書のタイトルと同名のシンポジウム「ドイツ語の場面レベルと個体レベルの表現タイプ」の成果をまとめたものである。

「場面レベル述語 (stage-level predicates)」と「個体レベル述語 (individual-level predicates)」が一言語体系に広く分布していることはつとに知られている。本シンポジウムは、この二項分布を意味論的・認知論的に捉え、それがドイツ語の諸現象にいかにか現れているかを実証的に示し、その特徴を理論的に明らかにすることを目標とするものであった。発表者がそれぞれ名詞、動詞、構文の各分野の考察を積み上げることで、当該の二項対立がドイツ語においてどのように現れるかの一端を示すことを目指した。この二つの述語の区別は形式意味論の分野で提案されたものであるが、意味論的・認知論的視点に立つと、「場面レベル述語」は「限定的状況」の描写、直接的「経験」の言語化、さらには「行為・出来事の場面化」を行うものとして敷衍でき、また「個体レベル述語」は、「恒常的属性の確定」、「経験の蓄積としての知識化」、そして「行為・出来事の累積化」と解釈できる。本シンポジウムは当該の二項対立のこのような広義の理解に立ち、またとりわけこのような二項対立の間に想定しうる流動性や段階性にも目を向けながら、各発表者がそれぞれ関心を持つ分野の言語現象の考察と関連させて提言を行うものであった。

本叢書の各論稿は、基本的にこのシンポジウムでの発表の内容を発展・拡充したものである。ただし本叢書をまとめるにあたっては、シンポジウムの導入部分も、一つの独立した論稿として冒頭に加えた。

本叢書全体に渡るテーゼを提示することを目指す宮下の論稿では、「場面レベル述語」「個体レベル述語」の区別と、その区別にしばしば使われる基準、またそういった基準から導き出される、それぞれの述語の意味論的・認知論的特性について述べる。そして本叢書の各論稿が提示しようとする際の基礎となる立場を表明する。

続く坂賀・小川論稿では、これまで「文法的性」あるいは「ジェンダー論」の問題として扱われてきた身分・国籍・職業名称を、上記の二項分布の観点から問い直す。「人」の「場面的」・「個体的」把握に焦点を当て、その結果、名詞句も「場面・個体」の視点から捉えられることを示す。

和田論稿では、前綴りを伴う動詞の意味特徴の参照性に着目した場合、「場面レベル」と「個体レベル」とに振り分けられる実態を明らかにする。とりわけ、*ein-/aus-*、*vor-/hinter-* という前綴りを持つ、一見対称的な複合動詞ペアに着目し、そこに参照性における違いがあることを論ずる。

段上論稿では、非分離前綴り **be-**を持つ動詞と、その基礎動詞に注目し、**be-**を伴う動詞には「外的視点からの全体的な事象把握」、基礎動詞には「内的視点からの個々の事象把握」という意味論的・認知論的な相違があることを実証的に示し、またこの相違が「場面レベル」「個体レベル」の区別と関係することを論ずる。

井口論稿では、与格名詞句を要求するとされる形容詞の、与格名詞句との共起に着目し、与格名詞句の出現が、文の総称性、さらには「場面レベル述語」「個体レベル述語」の区別とどのように関わるかを、いくつかの形容詞の分析に基づき考察する。

最後の武田・宮下論稿では、**werden** 受動文が可能な動詞と可能でない動詞があることに注目し、受動の可否に関するこれまでの議論を踏まえたうえで、その可否を「場面レベル述語」「個体レベル述語」という二項分布から説明することはできないかを探る。

以上の論稿を通じて、本叢書は品詞形態、構文成立を背後から司る意味論的・認知論的特徴としての「場面レベル」と「個体レベル」という二つの表現原理の存在を前提としつつ、実証的データを手掛かりに、両者の重複・推移の在り方を問うものである。このような立場から幅広い言語現象に焦点を当てることで、この二項対立がより豊かで実りある形で理解されるはずである。本叢書はそれゆえこの二項対立に関し、かなり大胆な解釈を行っているが、本叢書の挑戦的で意欲的な面と理解していただければ幸いである。本叢書が「場面レベル述語」「個体レベル述語」の区別に対し、新たな角度からの光を投げかけるものとなることを願っている。

2017年12月20日 宮下 博幸・小川 暁夫

# 場面レベル述語・個体レベル述語とは何か

宮下 博幸

## 1. はじめに

「場面レベル述語」と「個体レベル述語」という二項対立は、特に形式意味論の分野で広く知られた区別であるが、それがどのようなものとして定義され、どのような基準によって区別されるのかに関しては、それほど自明とは言えないように思われる。そのため本稿では、以下の論稿の導入として、本叢書の主題である「場面レベル述語」「個体レベル述語」とはどのようなものかを整理し、また本叢書の論稿が全体として共有する立場を明確にしてみたい。

## 2. 場面レベル述語と個体レベル述語

本叢書の前提となる「場面レベル述語」と「個体レベル述語」とはどのようなものであろうか。この区別はその名の通り、述語の区別に関わるものである。この区別は Carlson (1977) や Kratzer (1995) の研究によって一般に広く知られることとなった。ここではまず Kratzer がこの区別をどのようなものと見なしているかについてまとめてみたい。

### 2.1 Kratzer (1995)

Kratzer (1995: 125) は、「多くの文法現象が場面レベル・個体レベル述語の区別に敏感であることが示されてきている (“A number of grammatical phenomena have been shown to be sensitive to the distinction between stage-level and individual-level predicates.”)」と述べ、両者の相違を反映する文法現象として、以下の3つを挙げている。

THERE 挿入の可否：

(1) a. There are firemen available.

b. \*There are firemen altruistic.

裸複数名詞の解釈：

(2) a. Firemen are available. > There are available firemen.

b. Firemen are altruistic. > \*There are altruistic firemen.

独立分詞構文の解釈：

(3) a. Standing on a chair, John can touch the ceiling.

> If John stands on a chair, he can touch the ceiling.

b. Having unusually long arms, John can touch the ceiling.

> \*If John has unusually long arms, he can touch the ceiling.

(1) と (2) では available (利用できる) と altruistic (自己犠牲的な) という 2 つの述語が使われている。両者の述語は同様に述語として機能するものの、環境によって異なった振る舞いをする。(1) のような there の挿入は、available では問題ないが、altruistic の場合には非文となる。また裸の複数名詞の解釈の可能性に関しても相違が生じる。(2a) の available では「出動可能な消防士が存在する」という読みが可能であるが、(2b) の altruistic では「自己犠牲的な消防士が存在する」という解釈は困難で、「消防士は自己犠牲的である」という消防士の属性を述べる解釈のみが可能となる。(3) では動詞述語が取り上げられている。(3a) の standing on a chair は「ジョンが椅子の上に立つ」という解釈が可能であるが、(3b) の having unusually long arms は「ジョンが長い腕をもつ」というような解釈は困難である。このような振る舞いの違いは、述語の性質の違いによるものと考えることができる。すなわち述語には 2 つの異なるタイプがあると仮定することが可能であり、available, standing on a chair のような一時的特性について述べる述語は「場面レベル述語」、altruistic, having unusually long arms のような恒常的特性について述べる述語は「個体レベル述語」として区別できるとされる。

Kratzer はさらにドイツ語の例をもとに、これらの述語が示す、以下のような統語的解釈の相違についても言及している。

場面レベル述語：

(4) ... weil fast alle Flüchtlinge in dieser Stadt umgekommen sind.

- a. この町のほとんどすべての難民が死んだので
- b. ほとんどすべての難民がこの町で死んだので

個体レベル述語：

(5) ... weil fast alle Schwäne in Australien schwarz sind.

- a. オーストラリアのほとんどすべての白鳥は黒いので
- b. \*ほとんどすべての白鳥がオーストラリアで黒いので

(4) では ... umgekommen sind という「場面レベル述語」が用いられ、(5) では schwarz sind という「個体レベル述語」が用いられている。ここでそれぞれの例の前置詞句 (in dieser Stadt, in Australien) の解釈について見ると、(4) では主語名詞句を修飾する解釈、述語である動詞句を修飾する解釈のどちらも可能であるが、(5) では前置詞句が述語を修飾する解釈は不可能であり、主語名詞句を修飾する解釈のみ可能となる。Kratzer はこのような例をもとに、両述語の性質の相違を、形式意味論で提案されてきた枠組みによって説明する提案を行っている。

## 2.2 本叢書のテーゼ

「場面レベル述語」と「個体レベル述語」の区別は以上のように理解されるが、認知論的な観点からも興味深いものである。これらの述語の区別は認知論的に見て、どのような事態把握の仕方と対応しているのだろうか。Kratzer などの研究は、述語の 2 タイプの区別をいくつかの例をもとに理論的に示し、それを前提として議論を進めるにとどまり、それぞれがどのような意味的・認知的特徴をもつのかにはほとんど言及していない。また述語はそもそも「場面レベル述語」と「個体レベル述語」のどちらかに常に割り当てることができるものなのかも不明である。さらにこれらの述語の対立が明確な二項対立を示すのか、それとも両者の可変性、または段階的な連続性を想定することも可能なのかといった問題もある。このような現状の中で、本叢書では次のようなテーゼに依拠して議論を進めたい。

- (6) a. 「場面レベル述語」と「個体レベル述語」は、事象把握の認知論的な相違として把握可能である
- b. 場面レベル・個体レベル述語には可変性・段階性がある

前者に関しては 2.4 で触れるが、後者の点に関しては、近年、形式意味論の研究でも指摘されている。例えば Husband (2012: 14) は両述語について次のように述べている：

場面・個体レベル述語は可変的な振る舞いを示すことが知られている。*Having brown hair* は例えば典型的には個体レベル述語として振る舞うが、ある髪をしばしば染めると知られている人の場合、*Having brown hair* は場面レベル述語の振る舞いを見せる。 (“... and stage-level/individual level predicates are known to exhibit variable behavior. *Having brown hair*, for instance, typically behaves as an individual-level predicate, but if someone is known to dye their hair often, then *having brown hair* behaves as stage-level predicate.”)

このような立場をさらに敷衍するならば、「場面レベル述語」「個体レベル述語」のうちにも、より場面的またはより個体的といった段階性が想定可能ではないかと考えられる。このような前提に立ち、本叢書では以上の二項対立が示すと考えられる意味的特徴をそれぞれ「場面レベル性・場面レベル的」「個体レベル性・個体レベル的」とし、このような意味特徴に関して何らかの相違を示すと思われる文法現象に焦点を当ててみたい。以下ではそれぞれの意味的特徴に関して、より詳しく考察してみたい。



### 2.3 両述語を判定するテストとそれぞれの述語の特性

では「場面レベル性」「個体レベル性」とはどのような性質と考えたらよいだろうか。これに関しては十分な議論がないようであるが、これまで両述語を区別する複数のテストが提案されている。このようなテストで測られる相違が、どのような機能上の相違であるかを見ることで、それぞれの述語の典型的な特性について考察してみたい。なお、これまでの文献の例の多くは英語によるものであるが、ここではドイツ語の例を用いて両者の相違を見ていきたい。

まず両述語の相違を示す基準としてよく知られているのが、空間表現を挿入できるかという基準である (Fernald 2000, Manninen 2001, Maienborn 2004)。

(7) a. Thomas liest in der Bibliothek ein Buch.

b. ?Thomas kennt in der Klasse einen Studenten.

(7a) の *lesen* は空間を表す前置詞句 *in der Bibliothek* と問題なく共起可能であり、*das Buch lesen* は「場面レベル述語」と言える。それに対し (7b) の *den Studenten kennen* は *in der Klasse* のような前置詞句と共起が困難であるため、「個体レベル述語」とされる。ここから両述語はその「空間性」に関して相違があることがわかる。「場面レベル述語」はある具体的な空間における事象であるが、「個体レベル述語」は結果状态的であり、具体的な空間とは結びつかない事象である。「読む」は「どこで読むか」を問題にできるが、「知っている」は「どこで知っているか」を問題にしがたい。

また両述語は次のように時間表現を挿入できるかという点でも異なっていることが知られている (Fernald 2000, Manninen 2001) :

(8) a. Thomas liest heute Abend ein Buch.

b. \*Thomas kennt heute Abend einen Studenten.

(8a) の *das Buch lesen* のような「場面レベル述語」のもとでは *heute Abend* のような時間表現が問題なく挿入できるが、(8b) の *kennen* のような「個体レベル述語」は、このような時間表現との共起は困難である。このことから両述語は時間性に関して異なっており、「場面レベル述語」は特定の時間に位置づけることができるが、「個体レベル述語」はそのようなことができないものと考えられることができる。これと関連して、*zweimal*, *mehrmals* などの回数表現の挿入の可否や、*plötzlich* などの出来事の変化を表す副詞の挿入の可否も基準として追加することが可能であろう。次の例を見てみたい。

(9) a. Thomas liest zweimal/plötzlich ein Buch.

b. Thomas kennt \*zweimal/?plötzlich einen Studenten.

(9) のように、*zweimal* などの回数表現や *plötzlich* のような出来事の変化に関わる副詞は「場面レベル述語」とは整合するが、「個体レベル述語」のもとでは出現が困難である。以上から両述語は時間性に関して大きな相違があることがわかる。「場面レベル述語」はある特定の時間に位置づけられ、その時間に起こった出来事を表すが、「個体レベル述語」はもはや特定の時間には位置づけられない恒常的状态を表している。

両述語はさらに知覚動詞に埋め込めるかという点に関しても異なっている (Manninen 2001) :

(10) a. Man sieht Thomas ein Buch lesen.

b. \*Man sieht Thomas einen Studenten kennen.

(10) に見られるように、「場面レベル述語」は知覚動詞の *sehen* と共起可能であるが、「個体レベル述語」はそれが不可能である。この事実からも両述語の特性が見て取れる。すなわち「場面レベル述語」は直接の知覚や観察が可能な事象であるが、「個体レベル述語」は直接には知覚や観察ができない事象であると言える。別の表現をするなら、前者は知覚や観察を通じた「直接経験の言語化」であると考えられる。それに対し後者はその経験が蓄積して知識となったものを表現する、「知識の言語化」と表現することができよう。またこれを別の角度から見ると、どの程度直接経験に依拠し、またそれを参照してどの程度忠実もしくは構成的 (*kompositionell*) に出来事を言語化しているのかという、「参照性」の相違として解釈することも可能である。

さらにある一時点を示す時間節の中に生起できるかという点に関しても、両述語の違いがあることが知られている (Kratzer 1995, Fernald 2000) :

(11) a. Als Thomas ein Buch las, ...

b. \*Als Thomas einen Studenten kannte, ...

(11) でわかるように、「場面レベル述語」は *als* 節内に生起可能であるが、「個体レベル述語」は困難である。ここで見て取れる両述語の性質の違いは、「場面レベル述語」の場合は主語と述語によって表される事象が、特定の時点で実際に起こった個別的なものとも見ることができのに対して、主語と「個体レベル述語」で表される事象はそのようなものとは把握されず、特定の時点とは切り離された事象である点である。ここで両述語は事象性に関して相違があると考えらるこ

とができる。<sup>1</sup>

次は英語の **there** 挿入に対応するものであるが、テーマの **es** を挿入できるかという基準において、両述語は異なっている (Felser & Rupp 2001) :

- (12) a. Es liest ein Lehrer ein Buch.  
b. \*Es kennt ein Lehrer einen Studenten.

(12a) のように **es** の挿入が可能なものは「場面レベル述語」であり、(12b) のように挿入ができないものは「個体レベル述語」である。**es** の挿入は個別的な事象を導入する場合に可能になると考えられるため、ここでも両述語の相違は「事象性」に関わるものと考えられる。

さらに進行相にできるかという点に関しても、両述語に違いがあることが知られている (Manninen 2001) :

- (13) a. Thomas ist gerade dabei, ein Buch zu lesen.  
b. \*Thomas ist gerade dabei, einen Studenten zu kennen.

(13) に見られるように、進行相の表現と共起できるのは「場面レベル述語」のみであり、「個体レベル述語」はそれが困難である。ここでも両述語の事象性の相違が背後にあると仮定できる。「個体レベル述語」は特定の時間と切り離された恒常的な事象を表すため、進行相とは共起しにくいと考えられる。

さらなる両述語の相違として、過去時制で推意が生じるか否かというものがある (Musan 1997) :

- (14) a. Thomas las das Buch. > ... und jetzt auch  
b. Thomas kannte den Studenten. > ... \*und jetzt auch

(14a) のような「場面レベル述語」を「トーマスは以前その本を読んだ」のように過去時制にした場合、「今は読まない」のような推意は生じず、「そして今も読む」と続けることができるが、(14b) のような「個体レベル述語」を「トーマスは以前その学生を知っていた」のように過去時制にすると、「今はよく知らない」のような推意が生じるとされる。

最後に両述語の相違が現れる基準として、述語をスケール化できるかどうかが挙げられる (Kennedy/McNally 2005, Husband 2012) :

---

<sup>1</sup> これは上で見た時間性の相違とも考えられるが、ここでは命題全体がどのように把握されるかという、別の視点での相違と考えておきたい。

(15) a. \*Der Panda ist halb/einigermaßen/völlig schwarz-weiß.

b. Der Panda ist halb/einigermaßen/völlig aktiv.

(15a) の Der Panda ist schwarz-weiß というパンダの属性を表す文において、ist schwarz-weiß という述語は「個体レベル述語」と考えられるが、このような述語は halb/einigermaßen/völlig といった表現でスケール化できない。一方 Der Panda ist aktiv という文は halb/einigermaßen/völlig によってスケール化でき、これは ist aktiv という述語が「場面レベル述語」であることを示すとされる。スケール化できるかどうかは、さまざまな段階的状态を想定できるということである。(15a) では Der Panda が総称的に解釈され、「白黒である」という恒常的属性が述べられている。この場合にはある段階的状态は問題にしがたい。それに対し、(15b) では Der Panda が特定のパンダと解され、そのパンダがある時点で「活動的である」という一時的属性もしくは限定的状況が述べられている。この場合にはその都度の活動の度合いをスケール化することができる。ここでは両述語の相違として、文の総称性が関わっていると考えられる。主語の総称的な解釈を引き起こす述語は「個体レベル述語」であり、主語が特定の指示対象を指す解釈を引き起こす述語は「場面レベル述語」ということができる。また「個体レベル述語」は「恒常的属性」を付与するのに対し、「場面レベル述語」は「一時的属性(限定的状況)」を付与するものとも解される。

## 2.4 場面レベル性と個体レベル性

以上で「場面レベル述語」と「個体レベル述語」を判定する基準について見てきた。そしてその背後にあると考えられる、両述語の認知的相違についても考察してきた。まとめると、両述語の相違は以下の点に関して生じてくることになる。

- 空間性
- 時間性
- 観察可能性 (経験性・参照性)
- 事象性
- 総称性・恒常性

以上に基づくなら、「場面レベル述語」は「ある特定の時点や空間において観察の対象となり、外的な世界に対応する特定の事象」ということになり、「場面レベル述語」は「特定の時点や空間とは切り離されており、直接の観察の対象とはならない、属性的・恒常的・総称的な事象」ということになろう。では、このように異なる両述語は、互いにどのような関係にあるのだろうか。言語の一つの機能が出来事を描写するということであるとすると、「場面レベル述語」はそ

れを担うものといえる。では「**個体レベル述語**」はどのような認知論的基盤に立脚しているのだろうか。この述語は「**場面レベル述語**」で表されるような直接経験が知識化した結果についての言明であり、またそれは行為・出来事を累積化したものとみなした結果の言明であると考えることができる。これを次の例をもとに考えてみよう。

(16) a. Thomas liest das Buch.

b. Thomas kennt den Studenten.

ここで (16a) は基本的にこの文の話者の観察経験に基づく発話であると考えられる。それに対し (16b) は、「その学生を知る」という行為が行われた結果として、それが知識化した状態について述べるものである。「**個体レベル述語**」はこのためにある特定の時点や空間と切り離されているのだと考えられる。さらに次の例も見てみよう。

(17) a. ... weil fast alle Flüchtlinge in dieser Stadt umgekommen sind.

b. ... weil fast alle Schwäne in Australien schwarz sind.

(17a) の **umgekommen sind** という「**場面レベル述語**」はこの文の話者の観察経験に基づくものだと考えられる。一方 (17b) は「(オーストラリアで) 白鳥が黒い」という個別の経験を累積して知識化した一般化した結果の言明であると考えることができる。「**個体レベル述語**」と「**場面レベル述語**」はこのように経験と知識、行為・出来事とその累積化という点に関する相違として捉えることができよう。

両述語がこのようなものとして把握できるとするならば、経験の知識化の側面、行為・出来事の累積化の側面がどの程度強まるか、または弱まるかによって、「**場面レベル性**」と「**個体レベル性**」は必ずしも二項対立的なものではなく、むしろ段階的なものとなることが予想される。ここで同じ事象が時間性に関して相違する場合を考えてみよう。

(18) a. Thomas las das Buch.

b. Thomas las an manchem Abend das Buch.

c. Thomas las jeden Abend das Buch.

ここで述語 **liest ... das Buch** は「**場面レベル的**」であるものの、(18b, c) では頻度の副詞表現が加えられることにより、出来事の累積化が段階的に強まっている。(18a) と (18c) を比べると、(18c) はより恒常的な性質を表すものとなって

おり、それに伴い「個体レベル性」も段階的に強まっていると考えられる。このことは上で見た過去時制における推意の基準を当てはめると明らかとなる：

- (19) a. Thomas las das Buch. > ... und jetzt auch  
b. Thomas las an manchem Abend das Buch. > ... ?und jetzt auch  
c. Thomas las jeden Abend das Buch. > ... ?und jetzt auch

ここでわかるように (19a) は「もはや読んではいない」という推意は生じないが、(19c) は「もはや読んでいない」という推意が生じるため、und jetzt auch を続けると不自然と感じられやすい。

また同じ事象が空間性に関して相違する場合にも、「場面・個体レベル性」の変化が見られる可能性もある。

- (20) a. Die Lebensmittelverschwendung findet in München statt.  
b. Die Lebensmittelverschwendung findet überall statt.

(20a) では典型的な場合、「食品を無駄にすること」が in München という特定の空間で起こるという場面レベル的な解釈が自然であろうが、(20b) のように空間性の広がりを表す表現が加わると、さらに「食品を無駄にすることはいたるところで起こるものだ」のような個体レベル的な解釈も可能となってくると考えられる。

以上のように、「場面レベル述語」と「個体レベル述語」は単なる二項対立ではなく、そこに何らかの段階性や可変性を想定することが可能であると考えられる。本叢書ではこのような前提に基づいて、両述語の相違がドイツ語における実際の言語現象の中で、どのような形で現れてくるかを考察したい。

## 参考文献

- Arche, M. J. (2006): *Individuals in Time. Tense, Aspect and the Individual/Stage Distinction*. Amsterdam: Benjamins.
- Carlson, G. (1977): *Reference to Kinds in English*. Doctoral Dissertation. University of Massachusetts, Amherst, MA.
- Felser, C. & L. Rupp (2001): Expletives as arguments: Germanic existential sentences revisited. In: *Linguistische Berichte* 187, 289-324.
- Fernald, T. (2000): *Predicates and Temporal Arguments*. Oxford: Oxford University Press.
- Husband, M. (2012): *On the Compositional Nature of States*. Amsterdam: Benjamins.
- Jäger, G. (1997): The stage/individual contrast revisited. In: *Proceedings of WCCFL* 15, 225-239.

- Kiss, A. (2014): A remark on the individual/stage-level predicate distinction in English. In: *The Odd yearbook* 9.
- Kratzer, A. (1995): Stage-level and individual-level predicates as inherent generics. In G. N. Carlson and F. J. Pelletier (Hrsg.): *The Generic Book*. Chicago: Chicago University Press, 125-175.
- Krifka, M., F. J. Pelletier, G. Carlson, A. ter Meulen, G. Chierchia, & G. Link (1995): Genericity: an Introduction. In *The Generic Book*, ed. G. Carlson & F. J. Pelletier, 1-124. Chicago: The University of Chicago Press.
- Maienborn, C. (2004): A pragmatic explanation of the stage level/individual level contrast in combination with locatives. In: *Proceedings of the Western Conference on Linguistics* 15, 158-170.
- Manninen, S. (2001). A minimalist analysis of stage level and individual level predicates. In: *The Department of English in Lund: Working Papers in Linguistics*, Vol 1., 1-15.
- Musan, R. (1997): Tense, predicates, and lifetime effects. In: *Natural Language Semantics* 5, 271-301.

# 人を表す名詞の表現形式

## ——場面レベルと個体レベル——

坂賀 翠・小川 暁夫

### 1. はじめに

本稿では、場面レベルおよび個体レベルの分類を名詞句の範疇へと応用し、そこには単なる二項対立ではなく、段階性が存在するということを主張したい。

ドイツ語では、「人」を表す名詞の場合、生物学上の性と文法上の性は一致するものだと考えられている。<sup>2</sup>しかし、電子コーパスやインターネット検索からの用例をもとに、実際の使用を確認してみると、文法性が生物学上の性別を正しく反映してないことがある。本稿では、Professor という名詞に注目し、女性の指示対象への男性形の使用が許容される場合のメカニズムを統語的観点より考察する。そして、女性の指示対象への男性形と女性形の使用には「場面レベル性」、「個体レベル性」が大きく関わっていることを示したい。また、本来、個体レベル的な性質を持つと考えられる名詞句が、一部においては場面レベル的な振る舞いを見せることがあることを指摘し、そこには単なる場面性と個体性の二項対立ではなく、段階的なプロセスが存在するということを明らかにしたい。

### 2. 先行研究

#### 2.1 場面レベルと個体レベル

Carlson (1977) や Kratzer (1995) によって提唱された場面レベル述語と個体レベル述語の区別は、形容詞の分類として用いられることが代表的である。しかし影山 (2012) は、この対立が動詞や名詞においても共通して観察されるものであると主張している。Givón (1984: 55) は「時間的安定性 (time-stability scale)」の概念をもとに、名詞は時間的に最も安定している事物、動詞は最も安定性の低い事物を表し、形容詞はその中間に位置するものとした。影山は、これを場面レベルと個体レベルの相違に関連付けることができると述べている。そうすると、「名詞、形容詞、動詞」といった品詞が表す典型的な意味区別は、「属性、一時的状態、出来事」といった対の関係で考えられ得るとした。<sup>3</sup>

<sup>2</sup> 例外には *das Mädchen, das Fräulein, das Weib* などがある。

<sup>3</sup> しかし、後続の文章で時間的安定性は意味的な概念であり、品詞とは語彙的な概念であるため、場面レベルと個体レベルの区別とは単純には対応しないことを述べている。影山編 (2012: 5-7, 274-275) 参照。



## 2.2 Weinrich (1993)

女性を表す際に男性形が使用されることについては、主にジェンダー論の観点より総称男性名詞 (*generisches Maskulinum*) の使用が問題にされてきた。<sup>4</sup> ここでは文法的な観点から、性転化のメカニズムがどのように説明されているのかを確認する。Weinrich (1993: 332) は、女性の指示対象への男性形と女性形使用のメカニズムを「一時的に果たされる役割 (*Gelegenheits- und Momentanrollen*) 」と「行為役割 (*Handlungsrolle*) 」の対立関係によって説明した。(1) のように、一時的に果たされる役割を表す場合は、女性形が用いられることはほとんどなく、その場合は以下のように男性形が用いられる。それに対し、(2) のように、その名詞が行為役割を表すときには、次のように女性形へと転化させて表現する。

(1) Die älteste Tochter ist ein großer Langschläfer.

(2) Nun wollen wir aber einmal unsere Langschläferin wecken.

ここでは、名詞がどのような役割を果たしているのかによって男性形を用いる場合と、女性形へと転化させる場合があることが指摘されている。しかし、(1) の文での *Langschläfer* は「一時的に果たされる役割」だと言えるのだろうか。まして、Weinrich が「一時的に果たされる役割」と呼んでいるものが何を指すのかさえ明確とは言えない。したがって、女性を表す際に男性形が使用されるケースについてはまだ十分に解明されていないと言える。そこで、女性への男性形使用の許容が見られるのはいったいどのような場合なのか、という点を本稿での問題としたい。

## 3. 分析

本章では、ある特定の女性を表す際の男性形・女性形の使用の仕組みを明らかにすることを目的とする。女性の指示対象に男性形が使用されるのはどのような場合なのだろうか。また、それは女性形が使われる場合とはどのような違いがあるのだろうか。この問いに答えるために、電子コーパスやインターネット検索を用いて実例をもとに調査する。調査では人の身分や職業、国籍などを表す名詞の男性形・女性形の用例を分析し、どのような場合に女性を男性形で指示するのかを明らかにする。本分析では、主に *Professor* という名詞に焦点を当てる。なお、分析のための電子コーパスはドイツ語研究所 (IDS) が提供する COSMAS II<sup>5</sup>

<sup>4</sup> Klann-Delius (2005) は、人の性別が明確できないとき、性別の明示が重要でないとき、両性の人々を表すときや、一般を表す発言をするときに男性形の名詞や代名詞が使用されることを総称男性名詞の使用としている。

<sup>5</sup> <https://cosmas2.ids-mannheim.de/cosmas2/>

の書きことばコーパスを用いた。

### 3.1 Professor

まず、Professor という名詞を電子コーパスで調査すると、女性の指示対象への男性形の使用が確認できた。女性の指示対象に男性形の Professor が使用される場合の表現には、「Professor 名前」、「Frau Professor 名前」、「Frau Professor」および「コプラ文の述語名詞としての Professor」という表現のタイプがあった。<sup>6</sup> また、述語名詞としての表現に注目してインターネット検索をしてみると、「ist Professor」、および「als Professor」<sup>7</sup> の使用が確認できた。これらの表現を見ると分かるように、Professor が男性形で現れる場合には、Frau や名前と共に使用されることが多い。これらの表現はどれも「教授の資格を有する女性」を指しており、Professor は「肩書き」として機能していると言える。以下にそれぞれの表現を記載する。

女性の指示対象に Professor (男性形) が使用される表現タイプ (2000 件中)

• **Professor 名前** (33 件)

- (3) Dafür hat **Professor Gesine Schwan** Zeit, Heidelberg einen Besuch abzustatten. (Mannheimer Morgen, 24.02.2012, S. 23; Gesine Schwan besucht die Stadt)

• **Frau Professor 名前** (3 件)

- (4) Als **Frau Professor Kallas** trat Stephan Gogolka weiterhin bei den 11. Rätiger Bachwochen auf, in der Musikhalle Hamburg, im Gewandhaus Leipzig sowie während seines Italiengastspiels unter anderem in Mantova beim Festival "Arlecchino d'Oro". (Mannheimer Morgen, 22.02.2005; Musikalische Kapriolen)

• **Frau Professor** (3 件)

- (5) **Frau Professor** verlässt selten das Haus. Nur manchmal tippelt sie gekrümmt in den Garten und genießt die Sonne. (FOCUS, 06.11.2000, S. 129-131; NS-OPFER)

• **sein + Professor** (コプラ文述語名詞) (1 件)

- (6) »Eine Frau kann nicht **Professor sein**.« (Klugmann, Norbert: Die Nacht des Narren, [Roman]. - Meßkirch, 25.03.2011)

---

<sup>6</sup> Frau Professor は、「教授の妻」を意味する場合があるが、今回の対象には入れない。

<sup>7</sup> (9) はコプラ動詞の sein を伴うコプラ文であり、als Professor の als はコプラ文を作成する際に必要な付随成分だと考えることができる。ここでは als Professor を sein + Professor と同じコプラ文述語名詞のカテゴリーに含める。川島編 (1994: 512-513) 参照。

・コブラ文述語名詞（インターネット検索の例<sup>8</sup>）

- (7) Sie **ist Professor** für Klavier an der Musikhochschule Freiburg, leitet Meisterkurse in vielen Ländern und ist Jury-Mitglied mehrerer internationaler Wettbewerbe. 【<http://www.elzakolodin.de/>】
- (8) Sie **ist Professor** für Neurologie und Psychiatrie, mit Lehraufgaben in der Medizinischen und der Biologischen & Psychologischen Fakultät der Universität Göttingen. 【<http://www.neuroneum.de/fachtagung/referenten/>】
- (9) Zuvor war sie **als Professor** für International Business an der Internationalen Fachhochschule Bad Honnef Bonn. 【 <https://www.frankfurt-university.de/fachbereiche/fb3/kontakt/professorinnen-und-professoren/erika-graf/vita.html>】

### 3.2 Professorin

以上から女性を指す場合の **Professor** は「肩書き」を表す限定的な場面でしか使われていないことが明らかになった。では、**Professorin** はどのような場面で使われるのだろうか。この点を明らかにするため、女性形の **Professorin** の使用を同じ方法で検証した結果、**Professor** の調査では見られなかった形式が確認できた。それは、定冠詞、不定冠詞、形容詞、所有冠詞といった限定詞を伴う表現である。**Professor** の用例と比較すると、指示対象がより具体化されていることがわかる。以下に各表現の用例を記載する。

**Professorin** が使用される主な表現タイプ（200件中）

・ **die (Adj.) Professorin**（85件）

- (10) **Die Professorin** an der Stuttgarter Universität Hohenheim, dort lehrt sie Volkswirtschaft, streitet seit dem Frühjahr 1992 wider die Währungsunion. (Die Zeit, 29.03.1996; Streiterin wider den Euro)

・ **名前, Professorin (+前置詞句)**（43件）

- (11) **Ursula Hoyningen-Süess, Professorin** am Institut für Sonderpädagogik der Universität Zürich, leitet ein Forschungsprogramm zur Hochbegabung, in dessen Rahmen auch mit den Talenta-Kindern gearbeitet wird. (Neue Zürcher Zeitung, 09.07.2003, S. 37; ohne Titel)

・ **Professorin 名前**（34件）

- (12) Auch **Professorin Yolanda Koller-Tejeiro**, die jetzt in der Alexanderstraße lehrt,

<sup>8</sup> インターネット検索からの例文は2017年12月現在アクセス可能なものである。

ärger sich: „Es ist ein Skandal, dass so etwas Grundsätzliches wie Räume aus Gebühren finanziert werden.“ (die tageszeitung, 06.05.2010, S. 28; Studenten zahlen Uni-Miete)

• **sein + Professorin** (コプラ文述語名詞) (19 件)

(13) Julius' Frau, Holly Ingraham, **ist** ebenfalls **Professorin** für Physiologie an der UCSF. (David Julius, In: Wikipedia: [http://de.wikipedia.org/wiki/David\\_Julius](http://de.wikipedia.org/wiki/David_Julius): Wikipedia, 2011)

• **als Professorin** (16 件)

(14) Gegenwärtig ist Emma Lou Diemer **als Professorin** an der University of California und als Organistin an der First Presbyterian Church in Santa Barbara tätig. (St. Galler Tagblatt, 28.04.1999, Ressort: AT-INN (Abk.); Orgelkonzert in Appenzell mit Joan Devee Dixon)

• **eine Professorin** (7 件)

(15) Während Unternehmer und Gewerkschaft sich überlegen, wie der Umgang mit dem Arbeitsmittel geregelt werden kann, springt **eine Professorin** für die Büro-Internauten in die Bresche. (die tageszeitung, 05.05.2008, S. 9; Wie sich Spaniens neue Verteidigungsministerin neue Feinde schafft)

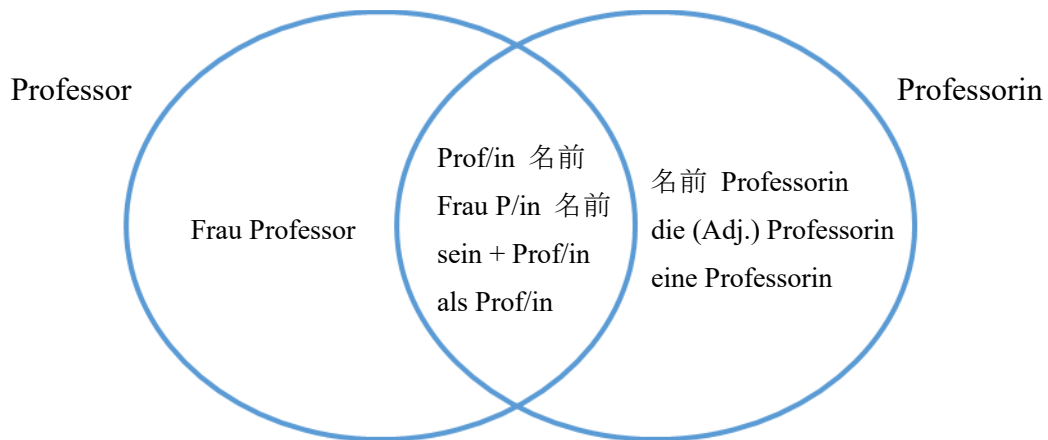
• **Frau Professorin** 名前 (1 件)

(16) Sie zitieren **Frau Professorin Ute Daniel** in Bezug auf Personen wie den „Reichsangehörigen“ Bühmann mit den Worten: „Das ist die reinste Freak-Show. (Braunschweiger Zeitung, 11.08.2009; Wichtigtuern keine Plattform bieten)

### 3.3 まとめ

以上の結果で明らかとなったように、Professor という名詞では、男性形で女性を表している実例が確認できた。コーパスで見つかった女性を表す Professor と Professorin の用例を比較分析すると、「Frau Professor」という形は Professor の時のみ、「Frau Professor/in 名前」、「Professor/in 名前」、「ist Professor/in (前置詞句)」は両方の場合において例が見られた。また Professorin のみで使用が見られたのは「名前, Professorin 前置詞句」、「eine Professorin」、「die (Adj.) Professorin」であった。これより、Professor と Professorin の使用分布は次のような図によって示すことができる。

図 2. Professor/in の使用分布



これらすべての表現について、冠詞の有無に注目すると、無冠詞のもの、不定冠詞付きのもの、定冠詞付きのものというタイプに分類することができる。そこから、男性形の許容が見られた表現は、**Professor** が無冠詞で使用される場合であり、それ以外の表現では、女性形のみが使用されることがわかる。

### 3.4 その他の名詞

名詞によって異なった振る舞いをするのかどうかを明らかにするために、**Professor** 以外にも身分や職業、国籍などを表す **Amerikaner, Arzt, Bäcker, Direktor, Doktor, Japaner, Lehrer, Minister, Wähler** といった 9 つの名詞を対象としてコーパス調査を行った。その結果 **Lehrer, Minister, Direktor, Doktor** といった名詞では、男性形で女性を指示している例が確認できた<sup>9</sup>：

#### • **Lehrer**

(17) Die Volksschule Rust begeisterte unter der Leitung von Frau **Lehrer** Sylvia Kugler.  
(Burgenländische Volkszeitung, 18.04.2013)

#### • **Minister**

(18) Frau **Minister**, gestatten Sie eine Zwischenfrage der Frau Abg. Bauer? (Protokoll der Sitzung des Parlaments Landtag von Baden-Württemberg am 12.10.2006. 10. Sitzung der 14. Wahlperiode 2006-2011. Plenarprotokoll, Stuttgart, 2006)

<sup>9</sup> 本稿のもととなる発表の質疑応答で **Bundeskanzler** の場合はどうかという質問を受けた。コーパス検索では男性形が使用されている例は見られなかったが、インターネット検索では **Bundeskanzler Merkel** という表現で男性形が使用される例が確認できた。ここでも、男性形が使用されたのは、**Bundeskanzler** が肩書きを表している場面だった。

#### • Direktor

- (19) Ein stattliches Bild geben die stolzen Friesenhengste unter der Führung von Frau **Direktor** Evelyn Althoff ab, und beim Einzug der indischen Elefanten beginnt manch ein Herz höher zu schlagen. (Mannheimer Morgen, 01.04.1996; Ungebrochener Zauber der Manege)

#### • Doktor

- (20) "Frau **Doktor** Kaiser hat in dieser Sache freie Hand." (Kleine Zeitung, 07.02.1998, Ressort: Landespolitik; Weisungsfrei: Offenbar war niemand wirklich zuständig)
- (21) Christa Krammer, die neue Gesundheitsministerin, ist **Doktor** der Staatswissenschaften. (Die Presse, 21.03.1994; Die Akademikerin)

ここで、男性形の許容が見られた名詞には、共通してある特定の集団である地位や身分にある人を表すという点が見られる。このことから、男性形と女性形の使用には、個々の名詞の意味的な特徴が関連していることが推察される。

## 4. 考察

本章ではこれまでに確認できた男性形・女性形の使用を、無冠詞、不定冠詞付き、定冠詞付き、といった冠詞のタイプ別に見ていき、場面レベル・個体レベルの観点より考察する。またその際、名詞句における指示性についても注目する。

### 4.1 無冠詞タイプ

まず、男性形の許容が見られた無冠詞での表現には、「Professor 名前」、「Frau Professor 名前」といった肩書き的に使用される場合と、X ist Professor というコプラ文の述語名詞として使用される場合がある。それぞれの表現タイプを場面レベル性・個体レベル性に注目して詳しく見てみる。

#### 4.1.1 肩書き名詞

男性形で女性を表している用例が確認できた代表的な表現タイプには、肩書き名詞が挙げられる。ここでは、肩書き名詞の振る舞いについて考える。肩書としての名詞の使用は、同格として名詞が並置されているものと考えることができる。Zifonun et al. (1997) や Duden (2009) は、同格について、次のように指摘している：

- Zifonun et al. (1997: 2039–2040)

„Das semantische Verhältnis zwischen NP und Apposition jedenfalls entspricht dem

Verhältnis zwischen Subjekt und nominalem Prädikativkomplement in Kopulakonstruktionen mit *sein*.“

- Duden (2009: 987–988)

die bekannte Rechtsanwältin Sabine Tessendorf

⇒ Sabine Tessendorf ist eine Rechtsanwältin.

die Stadt Rom

⇒ Rom ist eine Stadt.

以上を参考にすると、Professor Schmidt は Schmidt ist Professor、および Schmidt, der Professor ist とパラフレーズすることができる。ここでの ist は現在形で示されているため、時間・空間上での位置づけが可能であることを表す。一方、Professor Schmidt は時間や空間に依拠しない表現であり、Professor が sein の使用に比べてよりいっそう個体レベル的に機能していると考えられる。

#### 4.1.2 コプラ文述語名詞

ここでは、コプラ文の述語名詞の表現に着目する。本研究の対象としている Professor と、Weinrich が挙げた例文中の Langschläfer は、コプラ文の述語名詞になった場合に無冠詞、不定冠詞付きという異なった振る舞いをしていることが分かる。では、X ist Y といった叙述コプラ文の述語名詞が無冠詞の場合と不定冠詞付きの場合では、どのような区別があるのだろうか。吉田 (2010) は、職業や国籍などを表す場合には無冠詞で用いられ、性質や特徴が表される場合には不定冠詞を用いて表現すると述べている：

- 叙述コプラ文の分類 (吉田 2010: 75)

(22) Hans ist Komponist / Katholik. 無冠詞 NP (職業・国籍等)

(23) Peter ist ein Faulpelz / ein Genie. ein NP (性質・特徴)

吉田の例を参考にすると、Langschläfer は「寝坊」という「性質」を表すため不定冠詞付きタイプであり、Professor は「教授」という「職業」を表すため無冠詞タイプだと考えることができる。

さらに Geist (2006) は、無冠詞 NP と ein NP の差異について次のように記述している：

- 無冠詞 NP と ein NP の差異 (Geist 2006: 121)

(24) Er ist Athlet. (= Er treibt Sport.)

(25) Er ist ein Athlet. (= Er hat einen athletischen Körperbau.)

前者では、彼は「Athlet というカテゴリーに属する」ということを意味しているのに対して、後者では、彼が「Athlet だと判断される特徴を持っている」ということを意味している。

以上から、叙述コプラ文述語名詞の無冠詞タイプと不定冠詞付きタイプでは、意味内容によって使用が区別されることがわかった。

#### 4.1.3 場面レベル性・個体レベル性の検証

場面レベル性・個体レベル性の相違テストをもとに、コプラ文述語名詞の無冠詞タイプと不定冠詞付きタイプの振る舞いの違いをインフォーマントテスト<sup>10</sup> によって検証する。ここでは、本叢書の導入論文で示されている「空間表現、および時間表現を挿入できるか」と「過去時制で推意が生じるか」というテストをもとにドイツ語母語話者へのアンケート調査を行った。前者では、可ならば場面レベル的、不可ならば個体レベル的だと判断する。後者でも、可ならば場面レベル的、不可ならば個体レベル的とする。

まず、空間表現に注目して (26) から (31) の例文のアンケート結果を見てみると、不定冠詞付きタイプの方が高い容認度を持つことがわかった。すなわち、両タイプを比べた際には、無冠詞タイプの方が個体レベル的であり、不定冠詞付きタイプの方が場面レベル的であると考えられる。また、無冠詞と不定冠詞付きの両タイプの間には指示性 (Referenzialität) に違いがあることが考えられる。そして、不定冠詞付きタイプの方が特定のであることが明らかになった。このことから、不定冠詞付きタイプの方が場面レベル的だと判断できる。

表 1. インフォーマントテスト i

		容認度	コメント
(26)	Thomas ist in Deutschland Athlet.	57%	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ Im 26. Satz liegt der Focus mehr darauf, dass er dies in Deutschland ist.</li> <li>▶ 27. ist spezifischer.</li> </ul>
(27)	Thomas ist in Deutschland ein Athlet.	71%	
(28)	Thomas ist in dieser Stadt Feigling.	0%	
(29)	Thomas ist in dieser Stadt ein Feigling.	83%	
(30)	Thomas ist in Deutschland Professor.	83%	<ul style="list-style-type: none"> <li>▶ 30 ist unspezifisch und eher umgangssprachlich im Gegensatz zu 31.</li> </ul>
(31)	Thomas ist in Deutschland ein Professor.	83%	

<sup>10</sup> このインフォーマントテストはオンライン上のアンケートツールを使用し、ドイツ語母語話者の語感をもとに無冠詞タイプと不定冠詞付きタイプの例文ペアの容認度を確認したものである。各例文には「容認可能」、「容認不可能」、および「どちらでもない」という選択肢を与えた。また、両タイプで容認可能と答えた回答者には、意味の差異を記述する任意のコメント欄を設けた。



次に、時間表現に注目して (32) から (35) の例文の容認度を見てみる。すると、こちらでも、不定冠詞付きタイプの方が容認度の高い結果になった。すなわち、無冠詞タイプの方が個体レベル的であり、不定冠詞付きタイプの方が場面レベル的だと考えられる。さらに、不定冠詞付きタイプでは、より指示的および限定的な解釈がなされ、場面レベル性を持つと考えられる。

表 2. インフォーマントテスト ii

(32)	Thomas ist heute Athlet.	45%	▶33. ist spezifischer. ▶Im 33. Satz ist Thomas „nur“ heute ein Athlet.
(33)	Thomas ist heute ein Athlet.	77%	
(34)	Thomas ist jetzt Feigling.	0%	
(35)	Thomas ist jetzt ein Feigling.	84%	

最後に、過去時制に注目して (36) から (39) の例文を確認する。ここでは、前の二つの項目ほど容認度に大きな差異は見られないが、指示性には違いがあると考えられる。この例文のペアにおいても、不定冠詞付きタイプの方がより指示的だと判断できる。よって、こちらでも不定冠詞付きタイプの方が場面レベル的な性質を持つ。

表 3. インフォーマントテスト iii

(36)	Thomas war Professor.	72%	▶37. klingt ein wenig bestimmter als 36. (z. B. für ein bestimmtes Fach oder an einer bestimmten Uni.)
(37)	Thomas war ein Professor.	88%	
(38)	Thomas war Arzt.	83%	▶39. ist spezifischer. (z.B. in einem bestimmten Bereich)
(39)	Thomas war ein Arzt.	83%	

以上の検証より叙述コプラ文述語名詞の表現では、インフォーマントテストによる容認度と指示性の観点より、無冠詞タイプの表現において、より個体レベル的な振る舞いをする事がわかった。不定冠詞付きタイプの表現はこれに比べると場面レベル的であると解釈できる。

よって、コプラ文の無冠詞名詞と不定冠詞名詞では無冠詞名詞の方が個体レベル的だと判断できる。これより、個体レベル性が強いものから順に、Professorの「肩書き的使用」、「コプラ文における無冠詞述語名詞」、「コプラ文における不定冠詞付き述語名詞」となる。

## 4.2 不定冠詞・定冠詞タイプ

ここでは、女性形の使用のみが確認された不定冠詞、定冠詞を伴う表現について考える。その際、名詞句の指示機能に注目する。指示性 (Referenzialität) の強さは以下のような階層によって示される：

- 名詞句の指示性の強さ (Heggie 1988: 106, 吉田 2010: 77)

Deixis (直示) > Name (固有名) > definit (定名詞句) > indefinit (不定名詞句)

この階層に Professor を当てはめると、指示性が強いものから順に *der Professor*, *ein Professor* となり、右側へ移行するにつれ、指示性が弱まることがわかる。指示性が弱まると属性的になると考えられることから、階層の右側にいくほど属性的であり、個体レベル的になるという解釈が可能である。Heggie の指示性の階層の図には、不定名詞句の右側に、さらに無冠詞名詞句が位置づけられることが今回の研究により推測できる。

## 4.3 段階性

以上をまとめると、男性形と女性形の使用は、場面レベルと個体レベルの二項対立の範疇で、段階的に行われていることがうかがわれる。よって、本来、個体レベル的な性質を持つと考えられている名詞句の中にも段階性が存在するといえる。男性形の許容が見られた表現タイプは属性を表す傾向があり、強い個体レベル性を持つと判断できる。また、女性形のみが確認できたタイプは相対的に、場面レベル的である。男性形・女性形使用の段階性は次の図のように示すことができる。

図 2. 男性形・女性形使用の段階性 I <sup>11</sup>



矢印の比較的左側にある男性形の許容が見られた表現は、属性的なものであり、

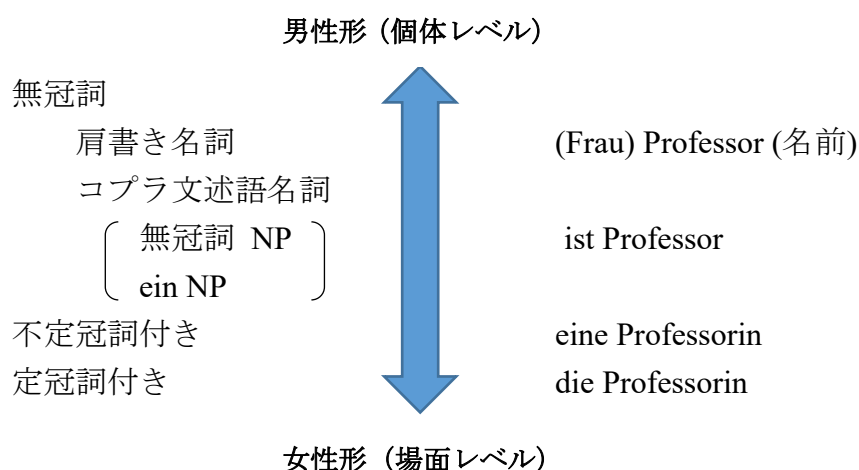
<sup>11</sup> 無冠詞の肩書き名詞が主として呼びかけの「場面」で用いられるのは、あくまで語用論レベルであると考え。本稿での主張は意味論・認知論レベルに関してである。

個体レベル的だと言える。また、矢印の右側の女性形のみが使用された表現は、個体指示的であり、場面レベル的である。

## 5. おわりに

本研究により、男性形・女性形の使用メカニズムには、名詞がどのような場面で用いられるか、また名詞がどのような意味的特徴を持つかが関連していることがわかった。個体レベル的な表現では男性形が許容され、場面レベル的な表現では女性形のみが使用されている。また、男性形の使用が見られた名詞には、ある集団の中で、ある地位や身分にある人を表すという共通点がある。以下の図に、今回問題とした段階性をまとめる：

図 3. 男性形・女性形使用の段階性 II



最初に紹介した Weinrich の例では、コプラ文の不定冠詞付き述語名詞と、所有冠詞付きの例のみが注目されていた。本稿では、それ以外の表現にも注目することで、より幅広く段階的で相対的な男性形・女性形使用のプロセスの存在を主張した。一部の名詞句に特化していた Weinrich の記述を含め、その背後には場面レベル・個体レベルの意味論・認知論が重要な役割を果たしている。一方、名詞領域での本考察は、これまで述語レベルで論じられていた、場面レベルと個体レベルの対立を名詞レベルへと敷衍するものである。その意味で、述語名詞が「職業」、「身分」、「国籍」、また「恒常的属性」、「一時的状態」などを表わすのも、場面レベルと個体レベルのスカラの中ではじめて話し手が引き起こし、聞き手の解釈による個々の意味現象をタイプ分け・分類している、いわば副産物として捉えるべきではないかという点を問題提起として、今後の展望に代えたい。

## 参考文献・使用コーパス

- Carlson, Gregory. (1977): Reference to Kinds in English. Doctoral Dissertation. University of Massachusetts, Amherst, MA.
- Duden (2009): *Die Grammatik: Unentbehrlich für richtiges Deutsch: Band 4*. Mannheim: Dudenverlag.
- Geist, Ljudmia (2006): *Die Kopula und ihre Komplemente*. Tübingen: Max Niemeyer.
- Givon, Talmy (1984): *Syntax: A Functional-Typological Introduction: Volume 1*. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Heggie, Lorie A. (1988): *The Syntax of Copular Structure*. PhD-Dissertation. University of South California.
- Helbig, G. / Buscha, J. (2013): *Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht*. München: Klett-Langenscheidt.
- Klann-Delius, Gisela (2005): *Sprache und Geschlecht: Eine Einführung*. Stuttgart: J.B. Metzler.
- Kratzer, Angelika (1995): Stage-level and individual-level predicates. In: Carlson, G. N. / Pelletier, F. J. (Hg.) *The generic book*. Chicago: Chicago University Press, 125-175.
- Weinrich, Harald (1993): *Textgrammatik der deutschen Sprache*. Mannheim: Dudenverlag.
- Zifonun, Gisela et al. (1997): *Grammatik der deutschen Sprache Band 2*. Berlin: de Gruyter.
- Zifonun, Gisela et al. (1997): *Grammatik der deutschen Sprache Band 3*. Berlin: de Gruyter.
- 影山太郎編 (2012): 『属性叙述の世界』くろしお出版.
- 川島淳夫編 (1994): 『ドイツ言語学辞典』紀伊國屋書店.
- 成田節・中村俊子 (2004): 『冠詞・前置詞・格』大学書林.
- 吉田光演 (2010): ドイツ語のコピュラ文と名詞句のタイプ分類, 『ドイツ文学論集』43, 75-89.
- Korpus: W-öffentlich - alle öffentlichen Korpora des Archivs W (mit Neuakquisitionen), Cosmas II web. Version 2.0, Institut für Deutsche Sprache.  
[<http://www.ids-mannheim.de/cosmas2/>]



# 不変化詞動詞に現れる個体レベル的特徴

和田 資康

## 1. はじめに

本稿では、ドイツ語不変化詞動詞の統語的特徴および意味的特徴を場面レベルと個体レベルに関連させて論じる。従来、特に個体レベルとの関連から考察されることのなかった不変化詞動詞にも、特定の指標を基準とするならば、個体レベル的な特徴が現れるケースがあることを指摘する。また一見すると双方が対称的な空間意味、あるいは逆の方向性を示す動詞ペアにおいて、そのような個体レベル的な特徴が非対称に現れることについても言及を行う。

具体的には (i) 二重不変化詞 *heraus-/hinein-* を伴う動詞に比べ、(単一) 不変化詞 *aus-/ein-* を伴う動詞には個体レベル的な特徴が見られること、また (ii) 不変化詞 *vor-* を伴う動詞に比べ、前綴り *hinter-* を伴う動詞にはそれらの特徴が顕著に現れること、そして (iii) 使役移動を表す用法に関して、不変化詞 *ein-* を伴う動詞に比べ、不変化詞 *aus-* を伴う動詞には、個体レベル的特徴の現れと関連する現象があることを示す。

## 2. 不変化詞動詞にみられる個体レベル的特徴

不変化詞動詞の空間参照性に関して、Zeller (2001) および McIntyre (2001) は参照物 (reference objects) との関連から構造分析を行っている。ここでは、両者の相互に補完する記述から、不変化詞動詞の参照の特徴、つまり動詞行為にどのような特定の空間内容が関連付けられるかについて考察する。

まず Zeller によると、前置詞句目的語に限定詞が伴う場合などに代表される機能的構造 (functional structure) とは異なり、不変化詞は非機能的構造であり<sup>1</sup>、「非明示的な参照物は非参照的である」<sup>2</sup> と述べられている。すなわち不変化詞は、前置詞句に見られるような明示的な参照物を持たず、空間における直接的な対応物への参照は行われない。本叢書の導入論文で言及されたように、具体的な空間における事態・出来事を場面レベルの典型として捉えるならば、参照性が後退するという点において、不変化詞動詞にも段階的な個体レベルへの接近があると考えられるようになる。

また McIntyre は「ランドマーク参照性の一般化」(Landmark Referentiality

<sup>1</sup> Zeller (2001: 127): *Particle definition*: Particles are heads of non-functional phrasal complements of the verb and do not leave their base position

<sup>2</sup> ebd.: 138: (...) implicit reference objects of particle verbs are non-referential.

Generalisation) の定義により、二重不変化詞動詞 (double particle verb (dpv)) と (単一) 不変化詞動詞 (single particle verb (spv)) の参照性の違いを「前者の基底にある参照物は参照的、特定のであり、トークンである。後者のそれらは、非参照的、非特定の、総称的であり、タイプである」<sup>3</sup>としている。

そして McIntyre の指摘<sup>4</sup>を受け、Zeller は以下の (1), (2) の例によって両不変化詞動詞タイプの違いを説明している。<sup>5</sup>

(1) a. Peter will einen Kreis herausschneiden.

b. Hier strömt Gas heraus.

(2) a. Peter will einen Kreis ausschneiden.

b. Hier strömt Gas aus.

Zeller によれば、話者が (1a) を述べた場合、聞き手はコンテキストにおいて際立つ (salient) 要素を参照物として選択する。そしてその際、例えば切り取り行為のなされる対象としての新聞紙や布切れ、あるいはガスが出る起点としての管の穴といった実体が認識される。これに対し、(2) では聞き手は参照物としての実体を認識しない。例えば (2b) に関しては、ガスが具体的にどこから出ているかという参照物との関連については言及されておらず、ガスが出ているという事態を表すことに重点が置かれている。

また McIntyre は不変化詞動詞の非明示的な参照物の選択が、聞き手の概念知識に基づいていることを指摘している。<sup>6</sup> これを受けて、Zeller は以下の (3) の文例により、二重不変化詞動詞と (単一) 不変化詞動詞の参照性の違いを説明している。<sup>7</sup>

(3) a. Ich habe heute drei Briefe hineingeworfen.

b. Ich habe heute drei Briefe eingeworfen.

まず (3a) の場合、聞き手はコンテキストや談話領域において、hinein- の非明示的な参照物と対応する適切な事物 (トークン) を探す必要がある。他方 (3b) において、聞き手は ein- の非明示的な参照物として、概念知識と当該不変化詞動

---

<sup>3</sup> McIntyre (2001: 285): LANDMARK REFERENTIALITY GENERALISATION (LRG): The underlying reference objects of dpv's are referential, specific and are tokens. Those of spv's are non-referential, non-specific, generic and are types.

<sup>4</sup> ebd.: 263

<sup>5</sup> Zeller (2001: 139)

<sup>6</sup> McIntyre (2001: 287)

<sup>7</sup> Zeller (2001:140)

詞により表される事態に基づいて、適切な事物(タイプ)を選択することになる。

Zeller はこのような両動詞タイプの違いを、以下のように方向規定句に生起可能な参照物の違いを例示することによって説明している。<sup>8</sup>

(4) a. Ich habe heute drei Briefe (in den Briefkasten / in den Mülleimer / in den Teich) hineingeworfen.

b. Ich habe heute drei Briefe (in den Briefkasten / \*in den Mülleimer / \*in den Teich) eingeworfen.

つまり二重不変化詞動詞の場合、(4a) のように、コンテクストに応じて任意の事物が参照物となりうるのに対し、(単一) 不変化詞動詞の場合は、(4b) が示すように、参照物はプロトタイプの概念知識として限定されている。このような不変化詞動詞によって表される事態と概念知識との関連は、本叢書の冒頭で述べられた「経験の蓄積としての知識化」という個体レベルに対する広義の解釈に通じている。

以上により、不変化詞動詞は、基本的に場面レベル的であるものの、その中に個体レベル的な特徴の現れも指摘できることを示した。このことはまた、通常、二項対立的に捉えられる場面レベルと個体レベルとの間に連続性がある可能性をも同時に示していると思われる。

### 3. 場面レベル / 個体レベルの非対称的分布

前章では、不変化詞動詞の個体レベル性について考察した。ここでは空間的な対称関係と個体レベル性の現れ方について論じる。まず空間的な「前 / 後」と関連する不変化詞 *vor-* および前綴り *hinter-* を伴う動詞を扱う。それにより空間的な対称関係と、これらの動詞における参照性の現れ方との関連について考察する。次に空間における「入 / 出」の両方向性と関連する不変化詞 *ein-* および *aus-* を伴う動詞を扱うことにより、使役移動における参照性の違いについて言及する。

#### 3.1 *vor-* Verben / *hinter-* Verben の参照性の違い

本稿では上記の考察のために (5) のように *vor-* を伴う動詞には *vorspielen*, *-zeigen*, *-fahren*、そして (6) のように *hinter-* を伴う動詞には *hinterlassen*, *-ziehen*, *-gehen* を代表例に選び、各文例の書き換えや付加による可否を見ることにした。

(5) a. Die Pianistin hat das Stück vorgespielt.

---

<sup>8</sup> ここでは Zeller (2001: 140) の説明に基づいて括弧の内容を記入した。



- b. Die Reisende hat die Fahrkarte vorgezeigt.
- c. Der Chauffeur hat den Wagen vorgefahren.

- (6) a. Die Lehrerin hat einen guten Eindruck hinterlassen.
- b. Die Managerin hat Steuern hinterzogen.
- c. Der Vorsitzende hat seine Mitarbeiter hintergangen.

まず両動詞の非明示的な参照物との関連を確認するために、(7), (8) のように「前置詞句＋基礎動詞」形式による書き換えを行った。

- (7) a. Die Pianistin hat das Stück [vor Publikum] gespielt.
- b. Die Reisende hat die Fahrkarte [vor dem Fahrer] gezeigt.
- c. Der Chauffeur hat den Wagen [vor das Gebäude] gefahren.

- (8) a. \*Die Lehrerin hat einen guten Eindruck [hinter sich] gelassen.
- b. \*Die Managerin hat Steuern [hinter den unbekanntem Ort] gezogen.
- c. \*Der Vorsitzende hat seine Mitarbeiter [hinter dem Beobachter] gegangen.

すると vor- を伴う動詞にはそれらの書き換えが成立するのに対し、hinter- を伴う動詞には成立しないことが分かった。ただし (8c) の hintergehen は、基礎動詞 gehen が元来、上記のような対格目的語をとることができないため、書き換えが不可能だと考えられる。

同じく非明示的な参照物との関連を示すために、次は (9), (10) のように、それぞれの動詞に場所・方向規定句の付加を行うことにする。

- (9) a. Die Pianistin hat das Stück [vor Publikum] vorgespielt.
- b. Die Reisende hat die Fahrkarte [vor dem Fahrer] vorgezeigt.
- c. Der Chauffeur hat den Wagen [vor dem Gebäude] vorgefahren.

- (10) a. Die Lehrerin hat einen guten Eindruck [\*hinter sich] hinterlassen.
- b. Die Managerin hat Steuern [\*hinter den unbekanntem Ort] hinterzogen.
- c. Der Vorsitzende hat seine Mitarbeiter [\*hinter dem Beobachter] hintergangen.

そうすると vor- を伴う動詞の述部は、当該の前置詞句が付加されても適格であるのに対し、hinter- を伴う動詞の述部は、それらが付加されると適格でなくなることが分かった。

以上の書き換えと付加からは、vor- を伴う動詞にはそれぞれに非明示的な参

照物が具体的に想定されるのに対し、**hinter-** を伴う動詞には非明示的な参照物を具体的には想定できないことが明らかとなった。

また本叢書の冒頭で言及された場面レベルおよび個体レベルの判別テストの観点からは、例えば (11), (12) のように両動詞を進行相の可否においても比較することができる。

- (11) a. Die Pianistin ist gerade dabei, das Stück vorzuspielen.
- b. Die Reisende ist gerade dabei, die Fahrkarte vorzuzeigen.
- c. Der Chauffeur ist gerade dabei, den Wagen vorzufahren.

- (12) a. <sup>?</sup>Die Lehrerin ist gerade dabei, einen guten Eindruck zu hinterlassen.
- b. <sup>?</sup>Die Managerin ist gerade dabei, Steuern zu hinterziehen.
- c. <sup>?</sup>Der Vorsitzende ist gerade dabei, seine Mitarbeiter zu hintergehen.

ここでは、**vor-** を伴う動詞は進行相に書き換えても容認されるのに対し、**hinter-** を伴う動詞はそのような書き換えを行うと容認度が下がることが分かった。

以上の判別基準に従うと、まず **vor-** を伴う動詞には 1. 参照物が明示されないものの、具体的な参照物が想定される点、そして 2. 進行相への書き換えが容認される点に基づいて、相対的に場面レベル的な特徴を指摘することができる。それとは反対に、**hinter-** を伴う動詞には 1. 参照物が明示されず、具体的な参照物も想定されない点、そして 2. 進行相への書き換えの容認度が下がる点に基づき、こちらは相対的に個体レベル的な特徴を指摘することが可能である。

また両動詞が非対称的な参照性を示すことに関しては、参照物によって規定される位置と、行為の前提となる身体性との関連に着目したい。一方で **vor-** を伴う動詞の参照性に影響を与える要因として、まず具体的な参照物によって前方規定 (z.B. **vor dem Gebäude**) が行われること、そして動詞行為 (z.B. **den Wagen vorfahren**) が基本的には話者の前方への動きとして捉えられることが挙げられる。この場合、動詞行為とそれに関連付けられる参照物は、ともに話者の (広義の) 視界内に位置づけられていることが想定される。他方、**hinter-** を伴う動詞の参照性に影響を与える要因として、まず参照物によって後方規定がなされること、そして動詞行為が基本的には前方への動きとしては考えられないことが挙げられる。これらの動詞においては、上記の書き換えや付加に関して言及したように、具体的な参照物を明示することはできない。この場合、動詞行為とそれに関連付けられる想定上の参照物は、**vor-** を伴う動詞とは逆に、話者の (広義における) 視界の外にあるものとして想定される。つまり **vor-** を伴う動詞の参照性の高さは、視界内における把握方法に関連しており、逆に **hinter-** を伴う動詞の参照性の低さは、視界外における把握方法に関連するのではないかと考えられ

る。これをまとめると次のようになる。

【図 1】非対称的分布の背景

vor-Verben の場面レベル的特徴の背景	hinter-Verben の個体レベル的特徴の背景
空間前方 = 視界内 / 参照性 [+]	空間後方 = 視界外 / 参照性 [-]

また vor- を伴う動詞は、分離性という統語特徴を伴っており、逆に hinter- を伴う動詞は、その大半が非分離性という語彙的単位としての特徴を示す。上記の考察においては、分離性質を持つ vor- を伴う動詞には相対的な場面レベルの特徴がある一方で、分離性質を持たない hinter- を伴う動詞には相対的な個体レベルの特徴があるとした。したがって「分離性 / 非分離性」という統語一般の性質と両レベルとの関連を問うならば、その事例となる分離性を伴う不変化詞動詞と非分離性を伴う前綴り動詞の関係を更に明らかにする必要がある。これは今後の課題としたい。

### 3.2 ein- Verben / aus- Verben の参照物の違い

次に双方がそれぞれ対照的な空間移動（入 / 出）を表す不変化詞 ein- を伴う動詞と aus- を伴う動詞について考察する。両動詞は使役移動、つまり特定の対象物のある方向への移動を引き起こす用法に関しては、使役対象が対格目的語となる点で共通している。以下で文例を挙げる不変化詞動詞 *einpumpen* / *auspumpen*, *eingießen* / *ausgießen*, *einladen* / *ausladen* は、それぞれ同一の基礎動詞が両不変化詞を伴う動詞ペアである。(13) – (15) において、一方の ein- を伴う動詞が、移動の対象物を対格目的語にとり、到達点である前置詞の目的語を対格目的語にとることができないのに対し、他方の aus- を伴う動詞は、むしろ起点である前置詞の目的語を対格目的語にとることが一般的である。

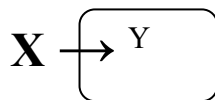
- (13) a. Der Tierpfleger hat \*das Aquarium / Wasser in das Aquarium eingepumpt.  
 b. Der Nachbar hat den überschwemmten Keller / das Wasser aus dem überschwemmten Keller ausgepumpt.
- (14) a. Der Kellner hat \*das Glas / den Sekt in das Glas eingegossen.  
 b. Der Betrunkene hat die Flasche / den Wein aus der Flasche ausgegossen.
- (15) a. Der Fahrer hat \*den Lastwagen / die Waren in den Lastwagen eingeladen.  
 b. Der Fahrer hat den Lastwagen / die Waren aus dem Lastwagen ausgeladen.

これらの「項交替」の現象を参照性の観点から見ると、ein- を伴う動詞におい

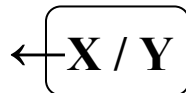
て、「移動の到達点」は常に参照されるのに対し、aus- を伴う動詞の場合、「移動の起点」は常に参照されるわけではないことがわかる。すなわち、通常は個体レベルとしては扱われない ein- を伴う動詞、および aus- を伴う動詞においても、前置詞句の参照性を指標とするならば、後者の動詞には前者の動詞に比べ、個体レベル的な特徴が指摘できるのである。

では、なぜこのような非対称が生じるのであろうか。ここでは両動詞タイプに見られる対象物および起点 / 到達点、すなわち参照物への働きかけに着目する。一方の ein- を伴う各動詞に関しては、(16a) のように、対象 X (z.B. Wasser) への働きかけがあり、到達点 Y (z.B. Aquarium) に対象 X が運搬される。つまり動詞行為がなされる時点では、直接的に焦点化されるのは使役対象 X のみである。他方、aus- を伴う各動詞については、(16b) のように、使役対象 X (z.B. Wasser) への働きかけが行われるのと同時に、X をその中に含んでいた起点 Y (z.B. Keller) の内部状態に変化が起こっている。つまり当該の行為は、対象 X のみならず、起点 Y への働きかけとしても解釈される余地があり<sup>9</sup>、そこでは Y も直接的に焦点化されうるのである。

(16) a. ein-Verben:



b. aus-Verben:



この両動詞グループにおける参照性の違いは、上記のように動詞行為の働きかけがなされ、焦点化されうる対象が異なることから生じると考えられるが、それら二つの対象が「容器」と「中身」という隣接関係にあることに着目するならば、(16b) の両者の間にはメトニミー作用が起こっている可能性も指摘することができる。すなわち、(広義の) 視界において際立つ「容器」、つまり対象 Y (z.B. Keller) を参照点 (source) として言語化することによって、(広義の) 視界において目立たない「中身」、つまり目標 (target) である対象 X (z.B. Wasser) へのアクセスが成立していると考えられるのである。つまり不変化詞 aus- を伴う動詞の項交替に見られるような、個体レベル的な特徴が現れるのは、どのようなメトニミ

<sup>9</sup> また *das Bild von der Wand abhängen* > \* *die Wand abhängen* のような例を参照。

一解釈が慣習的に適用されるかに関連していると考えられるのである。

#### 4. まとめ

本稿では不変化詞動詞における個体レベル性の現れ方について考察した。参照性の観点からは、まず前置詞句や二重不変化詞動詞との比較において、不変化詞動詞に通常想定される場面レベル性のうちにも、個体レベルの特徴が現れることを指摘した。そして「前 / 後」という一見対称的な空間性を持つと考えられる動詞ペアにおいて、参照性を指標とする個体レベルの特徴が非対称的に現れることを示した。ここでは身体性に関連する空間把握の違いがそれら非対称性につながるとするとともに、分離性と非分離性という統語一般の性質が両レベルに関係することを示唆した。最後に「入 / 出」という対照的な方向性を表す使役移動の動詞ペアに見られる項交替の現象を扱った。両動詞の参照性の違いを使役対象および参照物への働きかけの解釈の違いとして捉え、メトニミー解釈の慣習化と個体レベルの特徴とが関連していることを指摘した。

メトニミー解釈の適用が、いかなる背景において起こるのかという課題については、また稿を改めて論じたい。

#### 参考文献

- Hundsnurher, Franz ([1968] 1997): *Das System der Partikelverben mit aus in der Gegenwartssprache*. Hamburg (= Beiträge zur germanistischen Sprachwissenschaft 11).
- Kolehmainen, Leena (2005): *Präfix- und Partikelverben im deutsch-finnischen Kontrast*. Frankfurt am Main u. a.: Lang.
- Kratzer, Angelika (1995): Stage-level and individual-level predicates as inherent generics. In G. N. Carlson and F. J. Pelletier (Hrsg.): *The generic book*. Chicago University Press, 125–175.
- McIntyre, Andrew (2001): *German double particles as preverbs: Morphology and conceptual semantics*. Tübingen: Stauffenburg.
- Ogawa, Akio (1998): Zur Syntax und Semantik von Partikelverben. In: *Deutsche Sprache* 26, 160–173.
- Plank, Frans (1981): *Morphologische (Ir-)Regularitäten: Aspekte der Wortstrukturtheorie*. (Studien zur deutschen Grammatik, 13.) Tübingen: Narr.
- Stiebels, Barbara & Dieter Wunderlich (1994): Morphology feeds syntax: The case of particle verbs. *Linguistics* 32 (6), 913–968.
- Zeller, Jochen (2001): *Particle Verbs and Local Domains*. (Linguistik Aktuell / Linguistics Today Vol. 41) Amsterdam: Benjamins.

## be-動詞における意味機能の個体レベル化

段上 佳代

### 1. はじめに

本稿では、Kratzer (1995) の場面レベル述語 (stage-level predicates) および個体レベル述語 (individual-level predicates) の区別を場所格の項交替現象 (argument alternation) に敷衍して論じる。基礎動詞が前置詞句を伴い場所格を具体的かつ空間的に明示する一方で、be-動詞表現では対格目的語化に伴い場所格が対象として強調され、意味機能が変換することが多くの文献で示されている。例えば、(1b) のような be-動詞表現では、「全体的解釈」(holistische Interpretation) が生じており、壁全体へのペンキの塗布が含意されている。一方、基礎動詞と前置詞句の組み合わせ (1a) は、空間性を示すのみで、全体性を表す文要素や文脈なしでは全体的解釈を読み込むことは困難である。同様に、(2b) の be-動詞表現でも対象物 (対格目的語) への全体的な働きかけが生じ、(2a) では部分的積載の読み込みがなされる。

- (1) a. Er *schmiert* Farbe an die Wand.  
彼はペンキを壁に塗る  
b. Er *beschmiert* die Wand mit Farbe.  
彼は壁 (全体) をペンキで塗る
- (2) a. Er *lädt* Heu auf den Wagen.  
彼は干草を車に積む  
b. Er *belädt* den Wagen mit Heu.  
彼は車を干草でいっぱいにする

さらに be-動詞表現では、完了相 (perfektiv)<sup>1</sup> や行為の抽象化等の解釈が生じることが指摘されることもある。このように、be-動詞表現は空間性から乖離した様々な意味特徴を有するが、Kratzer の形式的な枠組みにおいては、基礎動詞

---

<sup>1</sup> 本稿のもととなる発表における質疑応答で、be-動詞の未完了性を主張する文献もあるという指摘を受けた (z.B. „aspectually open-ended“ Dewell 2015:55)。確かにすべての be-動詞に完了が含意されているわけではない (besitzen など)。しかし、場所格の交替がみられる場合には、動詞で表される一連の行為の終点が含意されていると考えられる。また 4 章で示すように、be-動詞は完了相動詞と整合性が高いとされる状態受動を形成しやすい。このことから、本稿では空間表現に関わる全体的解釈を伴う be-動詞に「行為の完了」の機能を想定する。

表現と同様「場面レベル述語」に分類される。

本稿の目的は、空間に関わる be-動詞表現が「場面レベル」・「個体レベル」の二項対立の枠組みの中に何らかの形で位置づけられるかを考察することにある。2章では、be-動詞の辞書記述および意味機能・アスペクトに着目した先行研究を概観する。3章では、Kratzer の述語分類法による be-動詞表現の位置づけを確認する。4章では、コーパスの例文および計画性含意の調査結果を基に、空間性を示す be-動詞の意味特徴を明らかにする。5章では、本稿のまとめとして場面レベルおよび個体レベルにおける be-動詞の意味機能の段階性を示し、be-動詞が相対的に個体レベル的な特徴を有していることを指摘する。また、基礎動詞表現と be-動詞表現の対立（機能の差異）をより大きな枠組みの中で捉える可能性を示唆するために、Langacker (1987, 1990) と Bühler (1934) のアプローチも紹介する。

## 2. be-動詞に関する先行研究

ここでは、be-動詞（または be-動詞を含むアスペクトに関連する前綴り動詞）の意味機能を記述した代表的な先行研究を概観する。

### 2.1 辞書記述

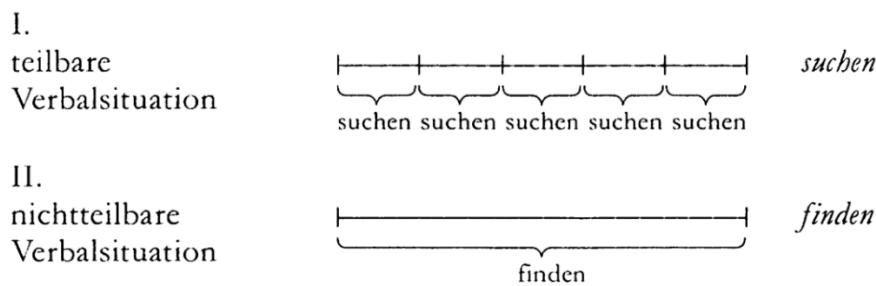
まず、辞書における be-動詞の定義を確認したい。Kluge (2002) の語源辞典によると、前綴り be- は、元来純粹に場所を示していた (*ursprünglich rein örtlich*) が、その後強調 (*Verstärkung*) の意味に一般化され、自動詞の他動詞化の機能 (*Transitivierung ursprünglich intransitiver Verben*) が備わったとされる。Duden (1999) にも自動詞の他動詞化 „(...) macht in Bildungen mit intransitiven Verben diese transitiv“ や、前置詞目的語の対格目的語化 „(...) macht in Bildungen mit transitiven Verben mit Präpositionalobjekt dieses zum Akkusativobjekt“ (ibid.:421) などの機能が挙げられている。ここでは基礎動詞表現と be-動詞表現が派生関係にあることを前提として be-動詞の意味機能が説明されているが、派生の「メカニズム」に関する言及はなく、接頭辞 be- の機能と基礎動詞の表す行為・事象の意味が、どのように関連づけられているのかは明らかではない。

### 2.2 意味機能・アスペクトの研究

一方で近年、強調や他動詞化に留まらない前綴り be- の意味機能が注目されている。Eroms (1980) によると、基礎動詞表現については前置詞句における明確な空間性がある „(...) handelt es sich in hohem Maße um Lokalphrasen, die eine Präposition mit „voller“ Semantik aufweisen.“ (ibid.:55) 一方で、be-動詞表現は場所格が対格目的語に昇格することによる焦点化 (*Fokussierung*) やトピック化

(Topikalisierung) の機能があり、その結果全体的解釈 (holistische Interpretation<sup>2</sup>) や完了相 (perfektiv) などの意味が生じているという。また、Eroms (1981) は、この現象を第二段階の受動態 (Passiv zweiter Stufe) と表現し、形式的な分析を行った。

Leiss (1992) は、動詞は原則的に二つのカテゴリーに分類できるとした。一つは、時間の経過に拘わらず動詞で表される行為が同じ状態を維持する動詞群である。このタイプは分節可能<sup>3</sup> (teilbar) かつ付加可能 (additiv) であることが特徴として挙げられており、suchen などがこれに該当する。もう一つは、同じ状態を維持しない動詞で、このタイプは分割することも、付加することもできない。例えば finden などの動詞は総体的動詞状況を描写しており、これを細分化することは不可能である：



(Leiss 1992:48)

Leiss は基礎動詞表現と be-動詞を含むアスペクトに関連する前綴り動詞はこの対立に該当するとし、前者については内的視点 (Innenperspektive)、非全体性 (nicht holistische Verbalereignisse)、分節可能 (Teilbarkeit)、加法性 (Additivität)、そして後者については外的視点 (Außenperspektive)、全体性 (holistische Verbalereignisse)、分節不可能 (Unteilbarkeit)、非加法性 (Nonadditivität) を意味特徴として挙げた。

成田 (2005) は Günther (1974) や Eroms (1980) らの分析を踏まえ、さらなる be-動詞の意味特徴として、結果に重点が置かれていること、また行為の抽象化・非個別化など、様々な特殊な意味解釈が生じることを示唆している。

Tanaka (2015) は、基礎動詞表現がコンテキストに依存しない不変量の意味を示すのに対し、be-動詞表現は直示的な言語手段による明確な標示がない場合、デフォルトは非直示的視点であることを指摘した。また、全体的・抽象的含意 (holistisch-abstrakte Implikation) や、対格化による要素のプロファイル化 (Profilierung) および視点 (Perspektive) の確定も示唆した。

これらの研究成果は、異なった言い方はなされているものの、be-動詞には基

<sup>2</sup> Eroms (2000) は、文意に何らかの制限がある場合、全体的解釈は必ずしも強制的に引き起こされるわけではないと指摘している (z.B. Sie belegt den Tisch mit einem Buch)。

<sup>3</sup> “Verben, die mit sich selbst identisch bleiben. Zerteilt man die vom Verb realisierte Verbalsituation in beliebig viele Phasen, so bleibt das Resultat immer gleich: die jeweiligen Phasen können mit dem gleichen Verb benannt werden.“ (Leiss 1992:47f.)



基礎動詞とは異なる特定の意味機能があると主張した点では一致している。これをまとめると次のようになる：

基礎動詞表現：未完了相で内的視点から個々の事象を把握

be-動詞表現：完了相で外的視点から全体的に事象を把握

### 3. 場面レベル述語と個体レベル述語

場面レベル述語と個体レベル述語の区別の観点から見た場合、基礎動詞表現と be-動詞表現は、いかに位置づけられるだろうか。まずそれぞれの述語がどのような特徴を示すのかを確認する。例文 (3a) において、*das Buch lesen* 「本を読む」という述語は、*„heute Morgen (今朝)“*, *„in der Schule (学校で)“*, *„zweimal (二度)“* などの時間・空間・複数回を表す表現と共起でき、一時的で現場性の高い場面レベル述語であるといえる。一方、(3b) の *den Studenten kennen* のような述語は、これらの副詞や副詞句と共起することができず、恒常性・属性を示す個体レベル述語であるといえる。換言すると、個体レベル述語は、一時的で現場性の高い行為や事象の表現には適していない。

(3) a. 場面レベル述語：一時性・現場性

[Heute Morgen / In der Schule / Zweimal] hat er das Buch gelesen.

b. 個体レベル述語：恒常性・属性

[\*Heute Morgen / \*In der Schule/ \*Zweimal] hat er den Studenten gekannt.

以上の述語の区別の観点から見た場合、基礎動詞表現と be-動詞表現は、以下のように時間・空間・複数回を表す副詞と共起可能であり、どちらも「場面レベル」に位置づけられる。

(4) a. 基礎動詞表現：

[Heute Morgen / In der Schule / Zweimal] hat er Farbe an die Wand *geschmiert*.

b. be-動詞表現：

[Heute Morgen / In der Schule / Zweimal] hat er die Wand mit Farbe *beschmiert*.

しかし、先行研究で指摘されているように be-動詞表現には「完了相で、外的視点から全体的に事象を把握する」という特殊な意味機能がある。これは、基礎動詞表現のように現場を忠実に描写しているといえるのだろうか。基礎動詞表現の前置詞句は be-動詞表現においては対格目的語で現れるが、対格目的語は前

置詞句に比べて空間性が低いと言えるのではないだろうか。

4章では、コーパスを用いた文脈調査および計画性を表す副詞表現との整合性の調査を行い、実際に be-動詞表現が基礎動詞表現に比べ現場性が低くなり、個体レベルの特徴を示しているかどうかを検証する。

#### 4. be-動詞表現・基礎動詞表現の意味機能調査

空間表現の項交替現象として扱われてきた be-動詞表現および基礎動詞表現の述語の特性、および場面レベル述語と個体レベル述語という二項対立の中での位置づけを再考するために、3つの調査（複数回を表す副詞（句）との共起関係の調査、冠飾句・状態受動として現れる頻度の調査、計画性含意の調査）を実施した。複数回を表す副詞（句）は、前章例文 (3) で説明したように、個体レベル述語では現れない。つまり、このような副詞（句）と共起する述語は場面レベル述語的特徴を有すると言える。また、行為の結果状態を表す過去分詞の冠飾句や状態受動は、修飾語または主語の状態・性質（＝属性）を表現する („Die geöffnete Tür“, „Die Tür ist geöffnet.“)。すなわち、過去分詞の冠飾句や状態受動を形成しやすい動詞は、より属性を表す個体レベルに近いと考えられる。さらに、属性を表す個体レベル述語は、一時的に行われる意図的な計画の表現とは整合性が低いとも考えられる。

##### 4.1 コーパス分析 (IDS-Korpus)

まず、ドイツ語研究所 (IDS Mannheim) の COSMAS II の書き言葉コーパス (W - Archiv der geschriebenen Sprache) を用いて、複数回を表す副詞句を伴う両表現の文脈調査<sup>4</sup> および冠飾句・状態受動<sup>5</sup> としての生起率の調査を行い、be-動詞表現に個体レベルの特徴が顕在化しているかどうかを検証する。調査対象とした4つの動詞ペアは、(i) 基礎動詞・be-動詞どちらも他動詞であり、(ii) 意味的に近く (suchen vs. besuchen などは除外)、(iii) 基礎動詞表現における「場所格」が、be-動詞表現において「対格目的語」になっているものを選択している。また、可能な限り類似した文脈になるよう、基礎動詞表現における前置詞目的語と、be-動詞表現における対格目的語は同一の対象のものを選んだ。

まずは、複数回を表す副詞句を伴う両表現の文脈調査結果から確認する。表1に示すように、あまり数は多く出なかったが、例えば die Wand schmieren は、

<sup>4</sup> 検索結果上位100件 (behängenのみ検索結果が100件を下回り、54件) に関して、文脈の観察を含めた質的調査を行った。

<sup>5</sup> Helbig/Buscha (1991) によると、状態受動は完了相の動詞からのみ形成可能である „Das Zustandspassiv kann folglich nur gebildet werden von solchen transitiven Verben, die perfektiv und transformativ sind, (...)“ (H/B 1991:181f.)。つまり、状態受動で現れやすい動詞は事象・行為の完結を表している。過去分詞を伴う冠飾句も状態受動の機能と類似している (冠飾句では名詞が修飾され、状態受動では主語の状態が表現される) ため、調査対象とした。

zweimal, noch mal などの副詞と共起した。<sup>6</sup>

[表 1] 基礎動詞表現・be-動詞表現における複数回を表す副詞（句）との共起数

基礎動詞と 前置詞句名詞	複数回を表す 副詞（句）	be-動詞表現と 対格名詞	複数回を表す 副詞（句）
schmieren + Wand	3 (zweimal: 2, noch mal: 1)	beschmieren + Wand	1 (zum wiederholten Male)
laden + Wagen	0	beladen + Wagen	0
hängen + Wand	2 (nach und nach)	behängen + Wand	0
bauen + Grundstück	2 (nach und nach)	bebauen + Grundstück	0

schmieren は、複数回を表す副詞（句）との共起が対象動詞の中では最多であった。以下、(5)~(6) は、ここに含まれる 2 つの例文である。

- (5) Außerdem sei an dem von türkischen Familien bewohnten Haus **zweimal** das Wort „Hass“ mit SS-Runen auf die Wand **geschmiert** worden. (Braunschweiger Zeitung, 07.02.2008; Polizei findet an Brandruine Nazi-Schmierereien)  
さらに、トルコ人家族の住む家の壁に、SS ルーン文字で二度「憎しみ」という文字が書かれた
- (6) Später **schmieren** Clavigo und sein Freund Carlos (Felix Knopp) die Wörter **noch mal** in verzweifelt großen Lettern an die Wand. (Hamburger Morgenpost, 12.01.2007, S. 20-21; Warum Goethe das letzte Wort lassen?)  
その後、Clavigo とその友人の Carlos は、それらの語をもう一度、ひどく大きな文字で壁に書いた

(5) では、二度の行為（「憎しみ」という言葉を壁に書いたこと）が表現されている。(6) では、以前に一度書いたことのある複数の語を、もう一度書いたことが表されている。(6) のように、schmieren においては複数回を表す副詞だけでなく、複数（形）の対格目的語との共起も多く確認できた：

- (7) Am Gymnasium in der Reithmannstraße 13 wurden neben SS-Runen, Hakenkreuzen und Keltenkreuzen auch die Worte "H.A.S.S." und "Skins Tirol"

<sup>6</sup> 以下、例文中の太字は発表者による。

an die **Wand geschmiert**. (Tiroler Tageszeitung, 28.06.1996, Ressort: Regional Innsbruck und Umgebung; Schmierereien an Innsbrucker Häusern)

Reithmann 通り 13 番にあるギムナジウムの壁に、SS ルーン文字、鉤十字、ケルト十字と並んで、「H.A.S.S.」と「Skins Tirol」という言葉が書かれた

(7) は (5) に類似しているが、記号と文字が混合して書かれたことを述べている。また、schmieren と共起する道具はペンキの他に血や絵の具、塗りつける対象は部屋の壁や教会の壁などバリエーションが豊富であった。すなわち schmieren は、他の文要素との組み合わせがオープンであり、構成的 (kompositionell) な特徴を有すると言える。

一方、beschmieren は、塗り付ける場所は「家の壁」、色は「ペンキ」が多く、他のバリエーションが少なかった。1 件のみであるが、beschmieren にも複数回を表す副詞句との共起が確認された：

- (8) Graffiti-Sprayer haben über Weihnachten **zum wiederholten Male** eine Wand des Plus-Marktes in der Lychener Straße **beschmiert**, hieß es im Polizeibericht. (Nordkurier, 03.01.2002; Märkte und Mauer mit Farben besprüht)

グラフィティ・スプレーヤーは、クリスマス期間を通して、何度も Lychener 通りにある Plus マーケットの壁を塗った、と警察が伝えた

(8) の beschmieren は、繰り返しの表現 (zum wiederholten Male) と共起していた。しかし、über Weihnachten 「クリスマス期間を通して」のような一定期間中の出来事である点から、上記 schmieren の複数回表現とは異なったアスペクトを表していると言える。すなわち、複数回を表す表現と結びついた場合、schmieren がある一時的な場面における行為の繰り返しを表すのに対し、beschmieren の場合、完結した行為が何度も繰り返されていることを含意している。

次に、hängen と bauen の例を見たい。これらは個々の動作の連続を示す副詞 (nach und nach) との共起が確認された。

- (9) So wurden in religiösen Familien 24 Bilder **nach und nach** an die **Wand gehängt**. (St. Galler Tagblatt, 17.11.2007, S. 51; Wartezeit-Verkürzer für Gross und Klein)

例えば信仰の厚い家庭では、24 枚の絵画が次から次へと壁に掛けられた

- (10) Damals war es vor allem in deutschsprachigen, protestantischen Familien gang und gäbe, im Dezember 24 religiöse Bilder **nach und nach** an die **Wand** zu

**hängen.** (St. Galler Tagblatt, 20.11.2008, S. 38; Im Türchen-Fieber)

当時、とりわけドイツ語圏のプロテスタントの家庭では、12月に24枚の宗教画を次から次に壁に掛ける習慣が広く行われていた

- (11) **Nach und nach baute** Kuhn die Hühnerställe auf dem grossen **Grundstück**, und der Eiersegen der bis 500 Hühner und der nachwachsenden Junghennen war dann bis zu seinem 90. Geburtstag, insgesamt während mehr als 60 Jahren, sein Tagwerk. (St. Galler Tagblatt, 20.07.2001, Ressort: WV-UZW (Abk.); Schlossherr ohne Allüren)

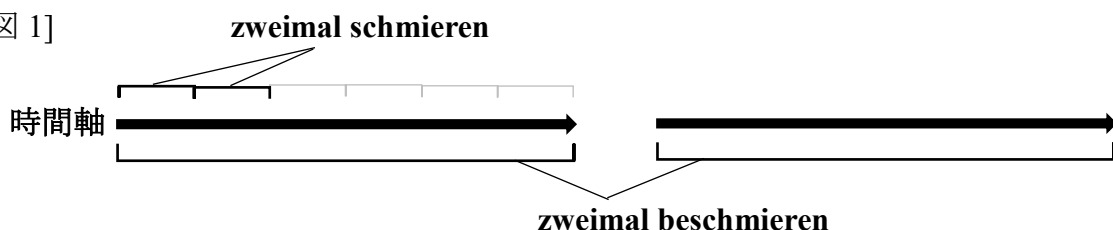
Kuhn氏は、広い土地に次から次へと鶏小屋を建てた。そして500羽の鶏とその子孫がもたらす卵の収穫は、彼の90歳の誕生日まで、計60年以上にわたって、彼の日課であった

(9) から (11) の例文すべてにおいて、基礎動詞 **hängen** と **bauen** は „nach und nach“ と生起しており、個別の動作、ひとつひとつの行為が数回続くことを描写している。(9) は (8) 同様、ある一定の期間 (12月) にある行為 (壁に絵を掛ける) を繰り返す表現だが、一つ一つの行為の積み重ねによって全体的な完成に近づくという点においては異なっている。このような複数回・個別動作の副詞 (句) との共起は、**behängen** や **bebauen** では見受けられなかった。

以上で確認したように、基礎動詞と比較すると **be-**動詞は複数回を表しにくく、複数回を表す副詞 (句) と共起した場合にはアスペクトが異なるという点で明確な相違が見られた。ここで、前章の例 (4) をもう一度取り上げたい。(12a) と (12b) は、どちらも複数回を表す副詞 **zweimal** を伴う文であり、前者は基礎動詞表現、後者は **be-**動詞表現である。一見類似する表現だが、以上の観察を踏まえると、意味解釈に違いがあると思われる。(12a) は、同じ空間内、限られた一定の時間内で二度ペンキを壁に塗ったという解釈だが、(12b) の場合は、一塗り終え、さらにまた塗るという完了動作の反復の解釈になると考えられる (図 1 参照)。

- (12) a. Er hat **zweimal** Farbe an die Wand *geschmiert*.  
b. Er hat die Wand **zweimal** mit Farbe *beschmiert*.

[図 1]



次は、基礎動詞と be-動詞の過去分詞が、それぞれどの程度冠飾句または状態受動として生起するかの調査である。表 2 は、基礎動詞表現と be-動詞表現の冠飾句率および状態受動率を示している。基礎動詞はほとんど冠飾句や状態受動として現れなかったが、be-動詞では高い割合が示され、両者に大きな差が確認できた。

[表 2] 基礎動詞表現・be-動詞表現の冠飾句率および状態受動率

	冠飾句率 (過去分詞)	状態受動率
schmieren	0%	0%
beschmieren	10%	1%
laden	0%	0%
beladen	45%	13%
hängen	0%	3%
behängen	9%	31%
bauen	0%	0%
bebauen	8%	8%

例えば behängen の場合、(13) のような *der mit Spiegeln behängten Wand*. 「鏡がびっしり掛かっている壁の」といった冠飾句表現や、(14) のような *fast jede Wand ist dicht behängt*. 「ほとんど全ての壁がぎっしりと埋め尽くされた」といった状態受動の例が多く確認された。

- (13) Die nebenan liegende Kantine ist der grösste Raum des Bunkers; der ovale Grundriss zeigt sich an der Form **der mit Spiegeln behängten Wand**. (Neue Zürcher Zeitung, 24.12.2012, S. 15; Das versteckte Hochhaus)

隣り合った食堂は、防空壕の中で最も大きな空間である；鏡がびっしり掛かっている壁の形に、楕円形の空間の輪郭が現れている

- (14) Vom Wohnzimmer über die beiden schmalen Treppenaufgänge bis zu einem größeren Ausstellungssaal auf der ersten Etage des Anbaus **ist fast jede Wand dicht behängt**. (Die Zeit (Online-Ausgabe), 14.06.2012; Aufbruch in eine lichtere Freiheit)

居間から両方の狭いのぼり階段を経て、増築された二階のかなり大きな展示ホールに至るまで、ほとんど全ての壁にぎっしりと（絵が）掛けられている

一方、基礎動詞では、hängen に状態受動が数例確認されただけである。一例を挙げる：

- (15) In Anlehnung an Arps spielerischen Umgang sind im Museum Liner skulpturale Arbeiten auch mal ungewöhnlich hoch **an die Wand gehängt**. (St. Galler Tagblatt, 08.04.2000, Ressort: TB-KUL (Abk.); Auge, Spiegel, Nabel)  
芸術家 Hans Arp の遊び心に富んだ手法を再現し、Liner 博物館では彫刻の作品が、異常なほど高く壁に掛けられている

(15) の場合、結果状態を際立たせる表現のため、ここでは hängen が状態受動で許容されたと考えられる。しかし、hängen の状態受動での使用は全体でみると3%と、behängen の約10分の1であり、通常は状態受動としては現れにくいと言える。

以上のコーパス分析から、基礎動詞表現が複数回を表す副詞または副詞句と共起し個々の行為を表すのに対し、be-動詞表現は、複数回を表す副詞または副詞句と共起する場合、完了動作の反復としてしか解釈できず、さらに対象物の属性を表す性質を持つと考えられる冠飾句・状態受動を形成しやすいことが明らかになった。

#### 4.2 計画性の含意

個体レベル述語は物や人の状態・性質を表すため、計画性に関する表現や、動詞で表される行為に状態・性質としての完成が考慮されていない表現とは整合性が低いと考えられる。このことは次の例からも明らかである。

場面レベル述語：a. Er *liest* **ziellos** das Buch.

b. Er möchte **so viele** Bücher **wie möglich** lesen.

個体レベル述語：a.\*Er *kennt* **ziellos** den Studenten.

b.\*Er möchte **so viele** Studenten **wie möglich** kennen.

場面レベル述語は ziellos などの無計画表現、また so ... wie möglich などの漸増的表現とは整合性が高いが、個体レベル述語はやはりこれらの表現とは生起しにくい。

このような事実をもとに、ここでは a. 無計画性（目的なし）および b. 漸増性（終わりが見えない表現）と基礎動詞表現ならびに be-動詞表現との共起関係を見てみたい。このような観点で基礎動詞表現と be-動詞表現を見ると、基礎動詞表現は ziellos を問題なく伴うことができるが、be-動詞表現はこの副詞を付加す

ると不適格な文になる。また、b の漸増性表現でも同様の結果になる。

基礎動詞表現：a. Er *schmiert* **ziellos** Farbe an die Wand.

b. Er möchte **so viele** Häuser **wie möglich** auf dem Grundstück  
*bauen*.

be-動詞表現：a.<sup>7</sup>Er *beschmiert* **ziellos** die Wand mit Farbe.

b.<sup>7</sup>Er möchte das Grundstück mit **so vielen** Häusern **wie möglich**  
*bebauen*.

これは、場所格を対格目的語に取る be-動詞には行為の完結が含意されていなければならず、計画性や漸増性を表す表現とは整合性が低いためだと考えられる。

以上の無計画性および漸増性を示す表現との共起関係の観察から、be-動詞表現は基礎動詞表現に比べ、個体レベル的な特性を有していると言える。

#### 4.3 調査結果のまとめ

コーパス分析および計画性の含意の調査から、基礎動詞と空間表現を表す前置詞句の組み合わせは、現場性が高く個々の動作に着目した表現であるのに対し、be-動詞と場所格としての対格目的語の組み合わせは現場性が基礎動詞表現に比べて低く、動作の完結を含意している表現であるということが明らかになった。これを場面レベル述語と個体レベル述語の区別と関連付けると次のように言える。場所格の項交替現象とみなされる基礎動詞表現およびbe-動詞表現は、いずれも対象への働きかけを行うという点において、場面レベルの特徴を有する。しかし、be-動詞表現では行為に完結が含意されており、結果状態の継続を表す冠飾句・状態受動を形成しやすい。この点においては、be-動詞表現は個体レベル述語的特徴を有していると言える（表3参照）。

[表3] 各述語が有する意味特徴・機能

	対象への 働きかけ	状態変化の 完了	結果状態の 継続
場面レベル述語	+	— <sup>7</sup>	—
基礎動詞表現	+	—	—
be-動詞表現	+	+	(+) <small>※冠飾句・状態受動として</small>
個体レベル述語	—	(+) <small>※含意</small>	+

<sup>7</sup> 継続相の動詞の場合



## 5. おわりに

本稿では基礎動詞表現と be-動詞表現はともに基本的に場面レベル述語であるが、より詳しく見ると、be-動詞表現は個体レベル述語と共通する性質を持ち合わせていることが明確になった。すなわち基礎動詞表現は典型的場面レベル述語だといえるが、be-動詞表現は周辺の場面レベルに属すると考えることができる。換言すると、be-動詞表現は個体レベル述語ではないものの、段階的に個体レベル述語的な性質を帯びていると言える。これまで場面レベル述語と個体レベル述語の二分法として議論されてきたが、今回の調査により、場面レベル述語ありながら個体レベル述語の特徴を示し、二項対立では説明できないようなカテゴリーの存在が示唆された。このことから場面レベル述語と個体レベル述語は単なる二項対立ではなく、連続的な観点から捉えられる現象として扱っていくことが必要であると言える。

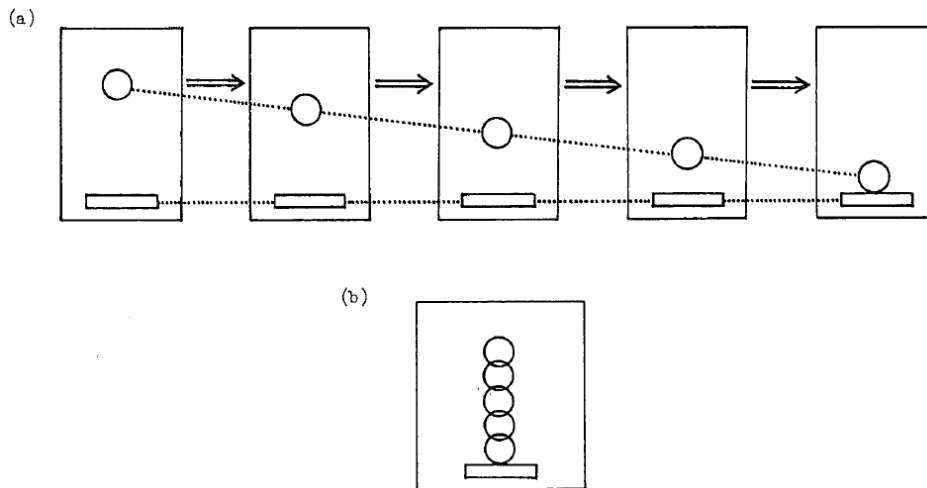
最後に、基礎動詞表現と be-動詞表現の対立を説明する際に有用と思われる二つの理論を紹介したい。

一つは、Langacker (1987, 1990) の「連続スキャンニング」(sequential scanning) と「総括スキャンニング」(summary scanning) である。「連続スキャンニング」とは、次々と起こる事態を連続的・個別に把握していく方法であり<sup>8</sup>、Langacker は例として動詞の cross (～を横断する) を挙げている。一方、「総括スキャンニング」は、構成要素を累積する形で把握し、その結果同時にアクセス可能な統合的構造体として認識する事態処理方法である。<sup>9</sup>「総括スキャンニング」に属する例として、前置詞の across (～を横断して) が挙げられている。

---

<sup>8</sup> “sequential scanning involves the successive transformation of one scene into another. The various phases of an evolving situation are examined serially, in noncumulative fashion; hence the conceptualization is dynamic, in the sense that its contents change from one instant to the next.” (Langacker 1990:78f.)

<sup>9</sup> “In summary scanning, the various facets of a situation are examined in cumulative fashion, so that progressively a more and more complex conceptualization is built up; once the entire scene has been scanned, all facets of it are simultaneously available and cohere as a single gestalt.” (Langacker 1990:78)

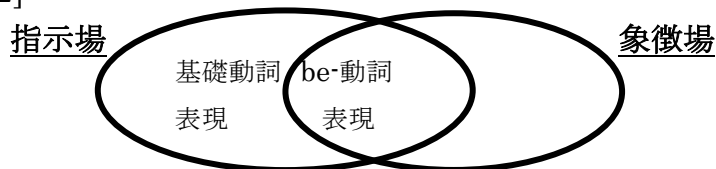


Langacker (1987:144)

これら二つのプロセスの処理方法は、基礎動詞表現と be-動詞表現にも当てはまる。基礎動詞表現が内的視点から個々の行為・事象を独立して認識し、連続的な観点から事態を処理している一方で、be-動詞表現は一連の行為を外的視点から統合的な構造体として認識しており、総括スキヤニングによる事態処理を行っていると言える。

同様に、Karl Bühler (1934) の二場理論 (Zweifelderlehre) も基礎動詞表現と be-動詞表現の対立に該当すると考えられる。Bühler によると、hier-jetzt-ich のような現場性の高い語は「指示場」(Zeigfeld) に属し、象徴記号としての命名語 (Nennwörter) は「象徴場」(Symbolfeld) に属する。また、daneben や danach などの概念語と指示語の組み合わせは指示的に機能する。このことから、空間表現の前置詞句は指示的であると想定できる。指示場および象徴場が場面・個体レベルと同様連続的だと仮定した場合 (c.f. Wada/ Danjo 2016)、be-動詞表現はその空間性を超えた意味特徴から「指示場」と「象徴場」の両方のカテゴリーに横断する形で存在すると考えられる。

[図 2]



本稿では 4 つの動詞ペアを調査対象とした。しかしこの結果が他の be-動詞表現にも拡大できるかどうかに関しては、今後の検証が必要である。さらに、be-以外の複合動詞にも本稿で明らかにしたような個体レベル的な性質が見られるのかどうか、また場面レベルと個体レベルの連続性の中に、複合動詞がい

かに分布しているのかといった点に関しても、今後その全体像を明らかにしていく必要がある。

#### 参考文献・使用コーパス

- Anderson, S. R. (1971) On the Role of Deep Structure in Semantic Interpretation. In: *Foundations of Language* 7/3, S. 387-396.
- Dewell, R. B. (2015) *The Semantics of German Verb Prefixes*. Amsterdam: John Benjamins
- Duden (1999) *Das große Wörterbuch der deutschen Sprache. Band 1*. Mannheim: Dudenverlag.
- Engel, U. (1988) *Deutsche Grammatik*. München: Iudicium.
- Eroms, H.-W. (1980) *Be-Verb und Präpositionalphrase*. Heidelberg: Carl Winter.
- Eroms, H.-W. (1981) Passiv erster und zweiter Stufe. In: Kohrt, M. / Lenerz, J. (Hg.) *Sprache, Form und Strukturen*. Akten des 15. Linguistischen Kolloquiums Münster 1980. Tübingen: Niemeyer.
- Fleischer, W. / Barz, I. (1992) *Wortbildung der deutschen Gegenwartssprache*. Tübingen: Niemeyer.
- Grimm, J. / Grimm, W. (1854) *Deutsches Wörterbuch. Erster Band*. Leipzig: Hirzel.
- Günther, H. (1974) *Das System der Verben mit BE- in der deutschen Sprache der Gegenwart. Ein Beitrag zur Struktur des Lexikons der deutschen Grammatik*. Tübingen: Niemeyer.
- Günther, H. (1987) Wortbildung, Syntax, be-Verben und das Lexikon. In: *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur* 109, S.179-201
- Helbig, G./ Buscha, J. (1991) *Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht*. Leipzig: Enzyklopädie.
- Kluge, F. (2002) *Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache. 24. Auflage*. Berlin: de Gruyter.
- Kratzer, A. (1995) Stage-level and individual-level predicates. In: Carlson, G. N. / Pelletier, F. J. (Hg.) *The Generic Book*. Chicago: Chicago University Press. S.125-175.
- Kühnhold, I. / Wellmann, H. (1973) *Deutsche Wortbildung. Erster Hauptteil: Das Verb*. Düsseldorf: Schwann.
- Langacker, R. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar. Volume I. Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1990) *Concept, Image and Symbol. The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: de Gruyter.
- Lohde, M. (2006) *Wortbildung des modernen Deutschen. Ein Lehr- und Übungsbuch*. Tübingen: Narr.

- Lüdeling, A. (2001) *On Particle Verbs and Similar Constructions in German*. Stanford: CSLI.
- Maylor, B.R. (2002) *Lexical Template Morphology. Change of state and the verbal prefixes in German*. (SLCS 58). Amsterdam: John Benjamin.
- 成田節 (2005) ドイツ語の be-動詞表現—対格化をめぐる—, 『言語情報学研究報告』 No.7, 361-381.
- Schröder, J. (1991) Wieder einmal be-Verben. In: *Deutsch als Fremdsprache 28. Heft 1*. S. 27-30.
- Tanaka, S. (2015) Kasusalternation und Perspektivenwechsel im deutsch-japanischen Kontrast. In: *Linguistische Berichte Sonderheft 20*. Helmut Buske. S.99-109.
- Wada, M. / Danjo, K. (2017) „Verdichtung oder etwas anderes? Präpositionalphrase und Partikel.“ In: Akio Ogawa (Hg.) *Raumerfassung- Deutsch im Kontrast*. Tübingen: Julius Groos.
- Korpus: W-öffentlich - alle öffentlichen Korpora des Archivs W (mit Neuakquisitionen), Cosmas II web. Version 2.0, Institut für Deutsche Sprache. (<http://www.ids-mannheim.de/cosmas2/>)



# 与格名詞句による形容詞構文の場面レベル化

井口 真一

## 1. 導入

従来、多くの文法書においてドイツ語の形容詞は意味的・統語的観点から分類されてきた (Heidolph et al 1981, Duden 1998, Engel 2009)。統語的分類の一つは格支配の有無によるものであり、形容詞と共起する名詞句は形容詞が支配する格目的語と捉えられている。しかし、多くの文法書で格支配するとされる形容詞であっても、格目的語は常に生起するとは限らない。たとえば *behilflich* は与格支配の形容詞の1つであるとされるが、与格が生起する (1a) と同様、与格が生起しない (1b) のような事例も確認される。<sup>1</sup>

- (1) a. Der Krankenpfleger ist mir behilflich.  
b. Der Krankenpfleger ist behilflich.

これまでの研究では、形容詞が支配する格目的語はどのようなときに現れ、どのようなときに現れないのかという点是不透明である。また格目的語が生起する構文と生起しない構文では意味特徴に違いがあるのかという点も十分に明らかになっていない。本稿はこれらの点に関して与格支配の形容詞に焦点を当て、「場面レベル述語」と「個体レベル述語」という述語の性質の違いについての対立概念を手がかりに、形容詞構文における与格出現のメカニズムを議論するものである。その上で、以下の2点を主張することを目的とする。

- (2) a. 「場面レベル述語」と「個体レベル述語」は単純な二項対立では捉えられず、両者の間には可変性・段階性が認められる。  
b. 形容詞構文における与格名詞句は限定的な状況を描写する典型的なマーカ―として機能し、与格の生起によって文全体は個体レベル性が弱まり、より場面レベル的な解釈に移行する傾向にある。

第1章の導入に続き、第2章では場面レベル述語・個体レベル述語の概念と、両者を分ける特性の違いの1つである総称性について Kratzer (1995) や Krifka et al. (1995) などの先行研究に言及する。第3章では対象の形容詞についてコー

---

<sup>1</sup> 以下、例文中の下線は筆者によるもので、形容詞と共起する与格を表す。

パスデータを中心とした事例分析を行い、与格が生起している例と生起していない例を比較する。第 4 章では事例分析の結果をまとめ、本稿で明らかになった点を指摘する。

## 2. 先行研究

### 2.1 場面レベル述語と個体レベル述語

「場面レベル述語 (stage-level predicates)」と「個体レベル述語 (individual-level predicates)」の区別に関しては Milsark (1974) や Carlson (1977) 以来、数多くの研究がなされてきた。一般的に、場面レベル述語は特定の時空間に結びつけられた局面を描写するものであるのに対して、個体レベル述語は時空間に縛られず、対象の恒常的な性質や特徴を述べるものであると考えられている。両者の区別に関する先行研究のうち、Kratzer (1995:125) は (3a) と (3b) を比較し、(3a) の *available* は典型的な場面レベル述語である一方、(3b) の *altruistic* は典型的な個体レベル述語であると述べている。

- (3) a. Firemen are available.      場面レベル述語 [存在／総称]  
    b. Firemen are altruistic.      個体レベル述語 [\*存在／総称]

Kratzer は述語の性質によって主語名詞の解釈の可能性に違いが生じることを指摘しており、(3a) は「出動可能な消防士がいる」という存在的な解釈 (existential reading) と「消防士は出動可能なものである」という総称的な解釈 (generic reading) の双方に解釈可能である一方、(3b) では存在読みは除外され、「消防士は利他的なものである」という総称読みに限定される、とする。<sup>2</sup> 場面レベル述語と個体レベル述語の区別はこのような解釈上の相違だけではなく、*There* 構文の終結部の位置に生起できるか、また知覚動詞構文の補部になれるかなど統語的な側面でも相違を示しており、様々な文法現象に関わるものとして認められている (導入論文参照)。

場面レベル述語と個体レベル述語の区別は異なる語を比較することによってなされることが主であり、両者の対立はもっぱら述語が語彙的に持つ意味的な性質を問題にしてきた。<sup>3</sup> そのため、両者の間に段階性や可変性が認められるかどうかという問いはこれまであまりなされておらず、述語が場面レベルと個体レベルのどちらかに明確に分類可能なのか、という点すら議論の余地があると

<sup>2</sup> 英語の裸複数名詞 (bare plural) に存在読みと総称読みの 2 種類があることは Diesing (1992) などでも指摘されている。

<sup>3</sup> 場面レベル述語と個体レベル述語の対立に相当する現象を扱うものとして、日本語学の文法研究における「事象叙述」と「属性叙述」の対立が挙げられる。この対立は場面レベル述語と個体レベル述語の対立と異なり、文全体としての意味を問題にする (益岡 1987)。

考えられる。<sup>4</sup>

## 2.2 総称性

文の総称性 (genericity) に関する先行研究のうち、Krifka et al. (1995:2f.) は総称文は (4a, b, c) のような「種指示 (reference to a kind) の名詞句による総称文」と (5a, b) のような「一般特性を表す文 (characteristic sentence)」の2つのタイプに分類されると指摘する。

- (4) a. The potato was first cultivated in South America.  
b. Potatoes were introduced into Ireland by the end of the 17th century.  
c. The Irish economy became dependent upon the potato.
- (5) a. John smokes a cigar after dinner.  
b. A potato contains vitamin C, amino acids, protein and thiamine.

(4) における the potato や potatoes のような名詞句は種のクラスを総称して述べたものであり、前章の (3) で例示した裸複数名詞に総称読みがなされた場合もこのタイプの総称文に該当すると考えられる。一方、(5) のタイプの総称文は名詞句が総称解釈されるかどうかは問わず、対象の習慣的特性や性質を記述するものである。この2つのタイプの総称文に共通する特性として、時間的、空間的に限られた局面が描写されているのではなく、一般的で恒常的な事態が把握されているという点が挙げられる。すなわちどちらのタイプの総称文も時間や空間の制限がなく一般性や恒常性の高い事象を描写したものであり、これは総称文の持つ意味的特性の1つであると考えられる。

上記の先行研究を踏まえ、本稿では「場面レベル性」と「個体レベル性」の対立を、主に総称性の違いという関連から考察したい。場面レベル性の高い表現は総称性が低い一方、個体レベル性の高い表現は総称性が高いといえる。次章ではコーパスデータの分析を行い、形容詞構文における与格名詞句の生起が文の総称性などの特性にどのように関わっているのかを議論する。そのうえで、同じ形容詞であっても与格の有無という統語環境によって述語の性質が変わりうることを示したい。

---

<sup>4</sup> 場面レベルと個体レベルの区別が文脈によって変動することを指摘したものとして、影山 (2009: 4) がある。影山は変動の原因を限られた形容詞語彙だけを扱っていることに求め、語彙には特有の性質があること、また意味の強制的解釈 (coercion) が起こりやすいことを理由に、文脈による変動があるのはむしろ当然であると述べている。



### 3. 事例分析

#### 3.1 分析対象の形容詞

名詞句を支配する形容詞の中では与格を支配するものが最も多い。<sup>5</sup> 与格支配の形容詞の中で、本稿では行為に関わる形容詞である *behilflich*, 認識に関わる形容詞である *bekannt*, 多義な形容詞であると考えられる *böse* を対象に、与格が生起する例と生起しない例を比較した。これら 3 つの形容詞は代表的な文法書である Duden (1998), Engel (2009), Helbig/ Buscha (2013) のうち少なくとも 2 つの文法書で与格支配の形容詞であるとされており、今後他の与格支配の形容詞と与格の共起可能性を調査する上でのケーススタディになると考えられる。<sup>6</sup> 事例はマンハイムのドイツ語研究所 (IDS) が提供する COSMAS II の書き言葉コーパスから収集し、サンプル調査として 200 例を任意で抽出した。

#### 3.2 *behilflich*

##### 3.2.1 与格が生起する事例の分析

*behilflich* は動詞 *helfen* と同様、助けという行為を受ける対象は与格の名詞句で現れる。200 例中 117 例 (59%) で与格が生起しており、以下の (6) と (7) はその該当例である。

(6) Nach Feststellung des Gerichts hatte der Kfz-Mechaniker einen Audi A4 veräußern wollen und nicht den richtigen Abnehmer gefunden. Er fragte seinen Bekannten, den Informatiker, ob er ihm **behilflich** sein könne. (Rhein-Zeitung, 18.11.2006; Haftstrafen für die Hintermänner)

(7) Dort hatte der 56-Jährige früher selbst Dienst geschoben. Ein ehemaliger Kollege war dem Detektiv besonders gerne **behilflich**. (Süddeutsche Zeitung, 19.01.2010, S. 31; Ein Fall für zwei)

(6) では人称代名詞 *ihm*, (7) では定名詞句 *dem Detektiv* が与格で現れている。この 2 つの例において、手助けをするという行為は主語である動作主の一般的な属性ではなく、与格名詞句で現れる特定の対象に向けられたものであると考

---

<sup>5</sup> この点に関し、Heidolph et al. (1981: 620) は「対格の補足語を必要とする形容詞は数少なく、属格は畏まった言い方に見られ、その一方で与格は様々な形容詞が相対的に自由与格を取りうるという点で支配的である」と述べている。

<sup>6</sup> 少なくとも 2 つの文法書で与格支配の形容詞としてリストに載っているものは以下の 21 の形容詞である。

*ähnlich, angeboren, behilflich, bekannt, böse, dankbar, eigen, ergeben, erinnerlich, feind, fremd, gemeinsam, gerecht, gewachsen, gewogen, gleichgültig, recht, treu, widerlich, willkommen, zuträglich*

えられる。また、時空間に結び付けられた限定的な行為であり、場面依存的なものである。さらに、与格が生起することによって主語名詞句を総称的に解釈することも困難になる。(8) は人称代名詞の **uns** が与格で現れている例で、主語名詞句である **Busfahrer** を総称的に解釈することは不自然である。

(8) Als er im Bus war, fuhren wir gemeinsam zur Diakonie. Der Busfahrer war **uns behilflich** beim Rausfahren, wir bedanken uns. (Nordkurier, 18.10.2003; LESERBRIEFE)

(8) の例はある特定の場面において **Busfahrer** が私たちの役に立ったということを描写したものであり、**Busfahrer** の一般特性を表したものではない。これらの例から、**behilflich** において与格が生起する場合は総称性が低く、ある特定の場面を描写しているという点で場面レベル性が高いといえることができる。

### 3.2.2 与格が生起しない事例の分析

サンプル調査を行った 200 例のうち、与格が生起しない例は 83 例 (41%) 確認された。以下の (9) と (10) は与格が生起していない事例である。

(9) Die allein erziehende Mutter von zwei Kindern (acht und 13 Jahre alt) hilft neben ihrer Ausbildung im Frauenhaus mit, begleitet ausländische Mütter bei Behördengängen und ist **behilflich** bei Übersetzungsarbeiten. (Mannheimer Morgen, 16.04.2008, S. 20; Nicht nur Schulnoten zählen)

(10) Wo in anderen Ländern im Supermarkt Angestellte beim Einpacken der kostenlosen Einkaufstüten **behilflich** sind, wird es in Deutschland bald Selbst-Scanner-Kassen ohne Personal und Service geben. (Die Zeit (Online-Ausgabe), 26.01.2006, S. 22; Treudoof und willenlos)

この 2 例において手助けを受ける受益者 (**Benefaktiv**) はそれぞれ、「翻訳作業を必要とする人 (全員)」や「スーパーの顧客 (全員)」であると考えられる。これに該当する者であれば誰でも手助けを受けることができるという点で、主語名詞句の行為は特定の対象に向けられたものというより、むしろ主語名詞句が持つ一般的な属性であると考えられる。このことから、与格が生起しない事例は生起する事例と比べて総称性が高く、個体レベル性が高いといえることができる。<sup>7</sup>

---

<sup>7</sup> 与格が生起しない例の中には、総称的に解釈されるもののほか、以下の例のように与格の名詞句を挿入することが情報構造上困難と考えられる例も見受けられた。

(i) Er war **behilflich**, als eine eben in den Raum gekommene Sekretärin noch einen freien Platz

典型的な総称文は時間的な限定性が存在しない。総称的な読み込みを強固なものにするものとして反復性や恒常性が考えられ、「常に手助けをする」というコンテキストは総称的な表現に結びつきやすいであろう。実際 *immer behilflich* の組み合わせでは与格と共起する割合が低くなり、35 例中 25 例 (71%) で与格は生起していなかった。その 1 例が (11) である。

(11) „Wir haben mit Gabi Wagentristl eine sehr herzliche und freundliche Postpartnerin. Sie ist **immer behilflich**, auch wenn man mehrere Pakete aufgeben möchte. (...)“ (Burgenländische Volkszeitung, 30.06.2011; Wie sind Sie mit dem Service der Post zufrieden?)

(11) の例では小包を出したいと思っている人は常に手助けをするという、主語名詞句 *sie* の恒常的な性質が表されている。つまり (11) は一般特性を表す総称文であり、受益者も特定の対象に限定されない。このように *immer behilflich* の組み合わせで与格の生起の割合が低くなるという事実は、与格が現れる場合には場面レベル的に解釈されやすいという主張の整合性を裏付けるものであると考えられる。<sup>8</sup>

以上より、*behilflich* と与格が共起する場合には主語名詞句の限定的な行為の描写がなされ、より場面レベル的に解釈される傾向にある一方、与格が生起しない事例では主語の一般的な属性に焦点が当てられ、個体レベル的な解釈に結びつきやすいといえることができる。

### 3.3 bekannt

#### 3.3.1 与格が生起する事例の分析

認識に関する形容詞である *bekannt* は、時間や空間に縛られず恒常的な知識状態を表すという意味特性から、これまで典型的な個体レベル述語であると考えられてきた (s. Kratzer 1995)。このような形容詞であっても、与格の生起によって述語の性質に何らかの違いは生じるのであろうか。サンプル調査として 200 例を任意で検索したところ、与格が生起している例は 49 例 (25%) 確認された。まずは与格が生起している例から見てみたい。

---

suchte: (Erfmeyer, Klaus: Geldmarie, [Kriminalroman]. - Meßkirch, 25.03.2011)

上記の例では後続する従属節において与格にあたる対象 (Sekretärin) が不定冠詞つきの名詞句で表されており、主節中に与格を代名詞で受けることは情報構造上の制約がある。

<sup>8</sup> *immer behilflich* の組み合わせで与格が生起する事例として、以下のような例が確認された。

(i) Seine Herkunft aus der roten Aristokratie war ihm immer **behilflich**. (Nürnberger Zeitung, 01.11.2012, S. 6; Xi Jinping ist Chinas zukünftiger Partei- und Regierungschef)

上記の例では主語名詞句 *seine Herkunft* の影響が及ぶ対象は限定的で、文脈上受益者を総称的に解釈すること困難である。このことから、場面レベル的に解釈される事例である。

(12) Das Haus war mir **bekannt**, aber der Blickwinkel ist doch ein anderer, wenn man in der Verantwortung steht. (Rhein-Zeitung, 17.10.2012, S. 23; Mendel beackert viele Baustellen)

(13) „Wir haben drei Erzieherinnen im Anerkennungsjahr für das Kinderprogramm zum Mitmachen (...) gewinnen können. Wenn die Erzieherinnen den Kindern **bekannt** sind, machen sie um so lieber mit.“ (Rhein-Zeitung, 29.07.2005; Kerb soll nostalgischer werden)

(12) と (13) はともに与格の名詞句が生起する事例であり、(12) では人称代名詞 *mir* が、(13) では定の名詞句 *den Kindern* が与格で現れている。*bekannt* の場合は与格の項には経験主 (Experiencer) が割り当てられるが、経験主が特定化され与格が生起する場合は、そうでない場合に比べて総称性が低いと考えることができる。これは (12) と (13) をそれぞれ動詞 *kennen* に書き換え、不定代名詞 *man* を主語にしたものと比較するとより明らかである。

(14) a. Ich kannte das Haus.  
b. Man kannte das Haus.

(15) a. Die Kinder kennen die Erzieherinnen.  
b. Man kennt die Erzieherinnen.

(14a, b) と (15a, b) を比較すると、特定の経験主が主語に立つ (14a) や (15a) は不定代名詞が主語である (14b) や (15b) と異なり、ある対象 (*das Haus*, *die Erzieherinnen*) を知っている主体は限定的で、総称性の程度が低いといえる。このことから、*bekannt* は従来個体レベル述語であるとされてきたが、与格が生起する場合には特定の経験主による個別の状況に焦点が当たり、典型的な個体レベルとしての性質が弱まっているとみなすことができる。

### 3.3.2 与格が生起しない事例の分析

*bekannt* が与格と共起しない事例は 200 例中 151 例 (75%) 確認された。以下の (16) と(17) はその該当例である。

(16) Anders als seiner Mutter Königin Elisabeth II. fällt ihrem Sohn dies jedoch schwer. Charles Passion für Umweltthemen ist **bekannt**. (Rhein-Zeitung, 15.05.2015, S. 4; Der Prinz, seine Briefe und die Politik)

(17) Alle Chöre sorgten mit ihrer Interpretation der Stücke, mit Dynamik und Musikalität (...). Viele der Stücke waren **bekannt** und die Besucher summten leise mit. (Mannheimer Morgen, 13.12.2011, S. 15; Lieder klingen durchs hohe Kirchenschiff)

与格が生起しない場合の **bekannt** は **berühmt** とほぼ同義であり、「有名である」という解釈がなされる。(16) と (17) の例も同様であり、「知っている」という状態は特定の個人に限られたものではなく、不特定多数に当てはまる。文脈上も特定の人称代名詞を経験主として与格で挿入することはできず、**vielen** のような不特定多数の経験主が想起される。<sup>9</sup>

与格が生起しない事例の中には、以下の (18) のように **für** を伴う前置詞句が **bekannt** に後続する事例が確認された。

(18) Die Deutschen sind **bekannt** für ihre Sammelleidenschaft. Briefmarken, Münzen, Streichholzschachteln, die Milchzähne der eigenen Nachkommenschaft (...). (Rhein-Zeitung, 27.08.1998; LAND & LEUTE)

(18) の例は「このドイツ人たちは収集癖で有名だ」という存在解釈と「ドイツ人というものは収集癖で有名なものである」という総称解釈の両方の可能性がある。ただし、いずれの場合も **für** を伴う前置詞句は主語名詞句である **die Deutschen** の属性描写として機能しており、個体レベル的な解釈を引き起こす働きがあるといえる。前節で示した通り与格名詞句が個体レベル性を弱める機能を担っているとすれば、**„X<sub>[Nom]</sub> ist bekannt für“** という構文において与格は生起しにくいと考えられる。実際、COSMAS II のコーパス全体では **„X<sub>[Nom]</sub> ist bekannt für“** という構文のヒット件数が 9483 件であったのに対し、人称代名詞が与格で現れる **„X<sub>[Nom]</sub> ist Y<sub>[Dat]</sub> bekannt für“** という構文のヒット件数は 1 件のみだった。<sup>10</sup> このことから、個体レベル的な解釈と整合性が高い前置詞句表現

---

<sup>9</sup> コーパスの用例の中には、以下のように不特定多数の経験主が与格で明示される例も確認された。

(i) Einmal den Alltag beiseiteschieben, Optimismus tanken, Lachen und Gefühle genießen – das ist das Motto von Bruce Kapusta, der **vielen** **bekannt** ist als „Der Clown mit seiner Trompete“. (Rhein-Zeitung, 16.08.2013, S. 17; Kapusta lässt wieder singen)

本稿ではこのような事例はあくまで周辺的なものとみなし、考察の対象としなかった。与格で生起する対象が不特定多数の場合であっても生起しない場合と比べて個体レベル性の程度が低いといえるのかに関しては今後の課題としたい。

<sup>10</sup> 人称代名詞として **mir, ihm, uns, ihnen** を付加して検索した。ヒットした事例は以下の例である。

(i) Ihre Zeitung ist **mir** **bekannt** für ihre guten und wahrheitsgetreuen Berichte. (Salzburger

が生起する場合、与格は現れにくいといえる。

以上の事例分析より、**bekannt** が与格と共起しない場合には先行研究が示す通り典型的な個体レベル述語とみなしうるが、与格と共起する場合には経験主が特定化されるという点で総称性の度合いが低く、共起しない場合と比べて個体レベル性が低いということが確認された。

### 3.4 böse

#### 3.4.1 与格が生起する事例の分析

**böse** は「怒っている」や「悪人である」のように複数の意味を持つ多義の形容詞であると考えられている。200 例の調査において、与格が生起している事例は 17 例 (9%) 確認された。以下の (19) と (20) はそれぞれ人称代名詞 **uns** と **ihm** が与格で現れている例である。

(19) „(...) Ich glaube, wir waren alle etas unfair Ihnen gegenüber. Bitte, seien Sie uns nicht **böse**. (...)“ (Claudia, Torwegge: Liebe hat ihre eigenen Gesetze, [Trivialroman]. - Hamburg, 1990 [S. 64])

(20) „Wenn ich ihm **böse** war, hat er mich immer wieder überzeugt, dass er der Beste ist“, erinnert seine Frau sich schmunzelnd. (Rhein-Zeitung, 30.08.2007; Goldene Hochzeit im Hause Urschel)

「怒っている」と「悪人である」という 2 つの意味を比較すると、「悪人である」という場合は主語名詞句の恒常的な性質が特徴づけられており個体レベル性が高い一方、「怒っている」という場合は主語名詞句の一時的状況が描写されており場面レベル性が高い。与格が生起する例では (19) や (20) と同様にすべての例で **böse** は「怒っている」という意味で解釈され、「悪人である」という解釈がなされる例は確認されなかった。このことから、与格には場面レベル的な解釈を導く働きがあると考えられる。与格が生起する場合には主語を総称的に解釈することも困難で、(21) の例における主語名詞句 **die Italiener** は「このイタリア人たちは私に怒っている」と存在解釈をするのが適切で、「イタリア人というものは私に怒っているものだ」のように総称解釈をすることは不自然である。

(21) „Die Italiener sind mir **böse**, weil ich nicht den Freifahrtschein für die Währungsunion gegeben habe.“ (Süddeutsche Zeitung, 04.11.1997, S. 3, Ressort: SEITE; Die Herrschaft des Dieners)

---

Nachrichten, 01.07.1992; Leute, die von Mazedonien wegziehen, sind eher Reisende)

以上のように böse が与格と共起する場合には「怒っている」という解釈に限定され、主語を総称的に解釈することもできないことから、与格の名詞句は一時的状況を描写する指標となり、文全体を場面レベル化する機能を担っているといえることができる。

### 3.4.2 与格が生起しない事例の分析

böse において与格が生起しない場合はどのような解釈可能性があるのだろうか。200 例中 183 例 (91%) で与格は現れておらず、(22) と (23) はその中で böse が「悪人である」と解釈される事例である。

(22) Sie ist **böse**, gemein und selbstsüchtig. Sie ist geizig, verlogen und ungerecht. (Die Zeit, 24.01.1986, S. 63; Spieglein, Spieglein an der Wand)

(23) Anscheinend sagten auch einige Unternehmer: „Die Belgier sind **böse**, deshalb verkaufe ich ihnen nichts.“ (Salzburger Nachrichten, 15.05.2000, Ressort: WIRTSCHAFT; "Kommt nach Belgien!")

(22) の例では gemein や selbstsüchtig と並列して böse が用いられおり、主語名詞句 sie の恒常的な性質を表した、まさに個体レベル性の高い事例であるといえる。一方、(23) の例は後続する文脈から主語名詞句 die Belgier の性質が描写されていると判断することができる。「ベルギー人というものは悪い人たちであるものだ」という総称的な解釈がなされることが通常であり、(21) と比較するとより個体レベル性の高い事例であると考えられる。<sup>11</sup>

böse が与格と共起しない場合にも「怒っている」と解釈される事例が確認される。以下の (24) は (23) と同様に複数名詞が主語であるが、(23) と異なり場面レベル的な解釈がなされる事例である。

(24) Die so Beglückten wollen's partout nicht haben. Künstler sind **böse**, Juroren beleidigt. Das Unbehagen bleibt. (Mannheimer Morgen, 22.03.1988, S. 26; Unter Betonpfeilern glitzern die Sterne)

(24) の例では Künstler は「芸術家たちは怒っている」のように存在解釈がなされ、「芸術家というものは悪い人たちである」といった総称解釈は適切ではない。

以上の事例分析より、böse が与格と共起しない場合には「悪人である」とい

---

<sup>11</sup> ただし、(23) の例において主語名詞句を「このベルギー人たちは悪い人たちだ」のように存在解釈する可能性は排除されない。

う個体レベルの解釈と「怒っている」という場面レベルの解釈の両方の解釈可能性がありうるが、与格と共起する場合には場面レベルの解釈に制限され、与格の生起は場面レベル的な読み込みを担保するものであるとみなすことができる。

#### 4. まとめ

前章ではコーパスデータを用いて与格が生起する例と生起しない例を比較した。事例分析の結果、それぞれの形容詞において与格が生起する構文と生起しない構文の特徴は以下のようにまとめられる。

(25) a. X<sub>[NOM]</sub> ist Y<sub>[DAT]</sub> behilflich.

: 特定の対象に向けられた X<sub>[NOM]</sub> の限定的な行為を描写

b. X<sub>[NOM]</sub> ist behilflich.

: X<sub>[NOM]</sub> の一般的な属性を描写

(26) a. X<sub>[NOM]</sub> ist Y<sub>[DAT]</sub> bekannt.

: 経験主が特定され、より個別的な状況を描写

b. X<sub>[NOM]</sub> ist bekannt.

: 属性描写表現との整合性が高く、総称性の程度の高い状況を描写

(27) a. X<sub>[NOM]</sub> ist Y<sub>[DAT]</sub> böse.

: X<sub>[NOM]</sub> の一時的な感情の状態を描写

b. X<sub>[NOM]</sub> ist böse.

: X<sub>[NOM]</sub> の一時的な感情の状態もしくは恒常的な性質のいずれかを描写

与格が生起しない構文は一般的、恒常的であり、総称性の程度が高い。すなわち個体レベル性の高い構文である。その一方、与格が生起する構文は限定的、一時的、個別的で、与格が生起しない構文と比較すると個体レベル性が低い構文であるといえる。ただし、与格が生起する場合にどの程度個体レベル性が失われ、どの程度場面レベル的になるのかは必ずしも一様ではない。behilflich や böse において与格が生起する場合には文全体が場面レベル化しているといってもよいが、bekannt の場合は与格が生起した場合でも場面レベルとして解釈されるとまではいえず、与格は個体レベル性を弱める働きを担うにすぎない。このように述語の性質の変化の程度に違いがあることは、場面レベル述語と個体レベル述語の対立が単純な二項対立で把握できるものではなく、両者の間には可変性や段階性が認められることを示しているに他ならない。つまり、同じ形容詞であっても、与格の生起により述語の性質が個体レベルから場面レベルに変わる形容詞や、述語の性質自体は個体レベルのままであるが典型的な個体レベルの性質の一部



が失われる形容詞が存在するのである。

本稿では形容詞構文における与格の生起に着目することにより、場面レベル述語と個体レベル述語の相関や与格が果たす機能の一端が明らかになった。形容詞が語彙的に持つ意味特徴のみに着目するのではなく、構文ごとの意味特徴を考慮に入れることによって、場面レベルと個体レベルの対立はより詳細に議論されうる。今後、本稿で扱わなかった与格支配の形容詞の事例についても調査を行い、議論の精密化を図りたい。

#### 参考文献・使用コーパス

- Carlson, Greg N. (1977): *Reference to kinds in English*. Ph. D. dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Diesing, Molly (1992): *Indefinites*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Duden (1998): *Grammatik der deutschen Gegenwartssprache*. 6., neu bearbeitete Auflage. Mannheim: Dudenverlag.
- Engel, Ulrich (2009): *Deutsche Grammatik*. Neubearbeitung. München: iudicium Verlag.
- Heidolph, Karl-Erich / Flämig, Walter / Motsch, Wolfgang et al. (1981): *Grundzüge einer deutschen Grammatik*. Berlin: Akademie Verlag.
- Helbig, Gerhard/Buscha, Joachim (2013): *Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht*. München: Klett-Langenscheidt.
- Kratzer, Angelika (1995): Stage-level and Individual-level Predicates. In: Carson, Gregory N. / Pelletier, Francis J. (eds.): *The Generic book*. Chicago: University of Chicago Press. S. 125-175.
- Krifka, Manfred / Carson, Gregory N. / Pelletier, Francis J. et al. (1995): Genericity. An Introduction. In: Carson, Gregory N. / Pelletier, Francis J. (eds.): *The Generic book*. Chicago: University of Chicago Press. S. 1-124.
- Milsark, Gary L. (1974): *Existential Sentences in English*. Ph. D. dissertation, MIT.
- 影山太郎 (2009): 「言語の構造制約と叙述機能」『言語研究』136, pp. 1-34.
- 益岡隆志 (1987): 『命題の文法—日本語文法序説』くろしお出版。

COSMAS II. W - Archiv der geschriebenen Sprache (W-öffentlich - alle öffentlichen Korpora des Archivs W (mit Neuakquisitionen))

[<http://www.ids-mannheim.de/cosmas2/>]

## werden 受動の可否と述語の特性

### ——場面レベルと個体レベル——

武田 有里子・宮下 博幸

#### 1. はじめに

ドイツ語の動詞の多くは、助動詞 *werden* を用いて受動文を形成することが可能である。

- (1) a. Das Kind wird gekämmt.  
b. Die Stadt wurde (durch feindliche Bomben) vollständig zerstört.

(1) に見られる *kämmen* や *zerstören* のような動詞は、それぞれ受動形成が可能である。しかし *werden* 受動は全ての動詞で形成できるわけではない。次の例を見てみたい。

- (2) a. \*Der Brief wurde von ihm bekommen.  
b. \*Was er sagen wird, wird von ihr nicht gewusst.

(2) の *bekommen* や *wissen* は他動詞ではあるが、受動形成は不可能だとされる (Helbig/ Buscha 1991:171)。これまで、*werden* 受動形成の可否に関しては、様々な立場から論じられてきた。しかし、そこではとりわけ受動が不可能な動詞にはどのようなものがあるかについての記述が主であり、受動可能な動詞にはどのような特徴があるのか、さらにはなぜ受動化できない動詞があるのかといった問いに対しては、まだ十分な解答が与えられていないようである。本稿では、Kratzer (1995) の「場面レベル」述語と「個体レベル」述語の区別の観点から、このような問いに何らかの説明を与えることができるのではないかという立場で考察してみたい。すなわち、どのような場合に受動形成が可能なのか、またなぜ受動化できる動詞と、できない動詞があるのか、そこにはどのような制限があるのかを問題とし、そのメカニズムを明らかにしたい。そして *werden* 受動の可否に「場面レベル」述語と「個体レベル」述語の区別が関わっているという立場から、受動の可否の説明を試みたい。

## 2. 先行研究

これまでの研究では一般にどのような場合に受動が可能となるのかという点について言及がなされてきた。さらに受動化が困難な動詞が問題とされ、そのような動詞にはどのようなものがあるか、またどのような場合に受動が不可となるかといった考察が行われてきた。ここではまず 2.1 で受動の可否に関わる動詞の特性についての指摘をまとめてみたい。さらに 2.2 では受動が困難とされる動詞に関するこれまでの記述をまとめる。

### 2.1 受動の可否に関わる動詞の特性

どのような動詞で受動形成が可能なのかという点に関しては、二つの立場を区別することができる。一つは動詞のとり動作主との関わりを指摘するもので、もう一つは動詞の他動性との関わりを指摘するものである。ここではこれらの立場を詳しく見てみたい。

#### 2.1.1 動作主との関連

動詞のとり動作主と受動との関わりを指摘しているものとして、まず Duden (2009) の記述を見てみたい。どのような動詞が受動可能であるかという点に関して Duden (2009: 547) は次のように述べている：

„(...) Das Verb muss im Aktivsatz eine Handlung oder Aktivität bezeichnen, der Subjektaktant also ein „echtes“ Agens sein. In den Passivsatz wird man dementsprechend, auch wenn keine Agensphrase vorhanden ist, ein belebtes Agens hineininterpretieren (...)“

「動詞は能動文において行為または活動を表すものでなければならず、その主語項は『真の』動作主でなければならない。したがって動作主句がない場合でも、受動文には有生の動作主が読み込まれる。 (...)」

Duden はこのように受動形成可能な動詞が、動作主を伴う行為・活動動詞だとしている。すなわち動作主性 (Agentivität) の強い動詞であれば受動形成が可能であり、werden 受動を形成できる動詞は、能動文において活動を表す行為動詞でなければならないとしている。このような立場を本稿では「動作主説」と呼ぶこととする。

またこれと関連して Zifonun/ Hoffmann/ Strecker (1997: 1796) は、行為読みと状態読みの二つの読みを有する動詞は、行為読みをする場合のみ受動形成可能だと述べている。(3a) では、それぞれの動詞が「測る/ 量る」という行為の意味

で用いられるため受動形成が可能である。一方 (3b) では「長さがある/ 重さがある」という状態の意味で用いられるため受動形成が不可能である。

(3) a. Fünf Zentimeter Stoff wurden (vom Schneider) gemessen./ Fünf Kilogramm Fisch wurden (vom Metzler) gewogen.

b. \*Zwei Meter werden von dem Stück Stoff gemessen./ \*Fünf Kilogramm werden von dem Sack gewogen.

### 2.1.2 他動性との関連

受動形成に関わる動詞の特性として他動性を指摘する研究もある。例えば Eisenberg (2013: 122) は次のように述べている：

„Zweistellige Verben sind passivfähig, wenn das Subjekt dem zweiten Argument gegenüber hinreichend agentiv ist, wenn semantische Transitivity vorliegt.“

「主語が第二の項に対して十分に動作主的であり、意味的な他動性がある場合に、二項動詞は受動の形成が可能である。」

ここでは上記の動作主の特性とともに、意味的な他動性 (Transitivity) が受動の可否に深い関わりがあることが示されている。すなわち、主語の目的語に対する動作主性や意味的な他動性がある場合は受動形成が可能であることが指摘されている。このような立場を「他動性説」と呼ぶこととする。

また Wunderlich (1997) にもこの「他動性説」と同様の考え方が見られる。Wunderlich (1997) によれば、能動文においてその出来事を引き起こす動作主が存在する場合に受動形成が可能であり、動詞の事象を動作主がコントロールしている特徴が見られるという。この動作主による動詞事象のコントロールという特徴は、Eisenberg の指摘する「意味的な他動性」と類似のものと言える。Wunderlich はこのような特徴が受動形成に影響していることを示す例として以下のものを挙げている：

(4) a. Auf der Party standen viele Leute rum. > Auf der Party wurde von vielen Leuten rumgestanden.

b. Auf der Party standen viele Kisten rum. > \*Auf der Party wurde von vielen Kisten rumgestanden.

ここでは同じ動詞 *rumstehen* が使われているが、動作主主語 (*viele Leute*) を伴う (4a) では受動が可能なのに対し、動作主の意味役割を持たない主語 (*viele Kisten*) を伴う (4b) では受動が不可能である。<sup>1</sup>

本稿では便宜的に「動作主説」と「他動性説」の二つの立場に分けたが、上述の Eisenberg の記述にも見て取れるように、これらの立場は相関するものだと言える。すなわちある動詞のもとに動作主が存在するなら、その場合には意味的な他動性もしくはコントロール性が高まることになる。両者を考慮するなら、このような意味的特性を持つ動詞であれば受動形成が可能で、これに当てはまらない動詞は受動形成が困難であるという一般化が可能だということになる。<sup>2</sup>

## 2.2 werden 受動を形成しない/しにくい動詞グループ

次にこれまでの文法書で主張されている、werden 受動を形成しにくい動詞グループに関する記述について見てみたい。本稿ではこのような動詞について詳細に扱っている Helbig/ Buscha (1991: 170ff) と Zifonun et al. (1997: 1792ff.) の記述の中で、それぞれの主張がほぼ一致するものを見ていきたい。このようなタイプは以下の 8 つにまとめられる。

タイプ 1 : 思考や知識内容、命題を有する動詞

- (5) a. Er kannte das Buch nicht.  
b. (\*) Das Buch wurde (von ihm) nicht gekannt.<sup>3</sup>

タイプ 2 : 金額・内容・量などの単位を表す動詞

- (6) a. Das Heft kostet 80 Pfennig.  
b.\*80 Pfennig werden von dem Heft gekostet.

---

<sup>1</sup> Bausewein (1990: 35) は次の例のように、他動詞の無生物主語でも動作主性がある場合、受動態における主語になりえることを示している。

Der Wind stößt *die Tür* auf. > *Die Tür* wird vom Wind aufgestoßen.

<sup>2</sup> これに対し Engel (1996: 454) は次のように述べている :

„Da die Grenze zwischen passivfähigen und nicht passivfähigen Verben nicht durch eine allgemeine Regel angegeben werden kann, muß bei jedem einzelnen deutschen Verb mitgelernt werden, ob es passivfähig ist.“

「受動可能な動詞と受動不可能な動詞の境界は、一般的な規則によって示すことができないため、受動可能かどうかは、ドイツ語の動詞を習うたび同時に学習する必要がある。」このような立場は、次節のように受動の可能性を動詞ごとに記述していくことにつながる。

<sup>3</sup> (\*) は文法性の低い文 (*halbgrammatischer Satz*) を表す (Helbig/ Buscha 1991: 16)。

タイプ 3 : 所有関係を表す動詞

- (7) a. Er bekam den Brief.  
b. \*Der Brief wurde von ihm bekommen.

タイプ 4 : 不定詞句を伴う知覚動詞

- (8) a. Er sieht sie kommen.  
b. \*Sie wird (von ihm) kommen gesehen.

タイプ 5 : 再帰動詞

- (9) a. Er wäscht sich.  
b. \*Er wird von sich gewaschen.
- (10) a. Hans und Fritz verstehen sich.  
b. \*Hans und Fritz wurden von sich verstanden.

タイプ 6 : 知識内容を表す動詞

- (11) a. Er schüttelte seinen/ den Kopf.  
b. \*Sein Kopf/ Der Kopf wurde (von ihm) geschüttelt.

タイプ 7 : 目的語が機能動詞と 1 つの密接な意味単位を形成する場合

- (12) a. Die Soldaten nahmen Aufstellung.  
b. (\*)Von den Soldaten wurde Aufstellung genommen.

タイプ 8 : 内的目的語 (inneres Objekt) を持つ場合

- (13) a. Er kämpfte einen schweren Kampf.  
b. (\*) Ein schwerer Kampf wurde von ihm gekämpft.

タイプ 1 には *kennen* や *wissen* などの思考や知識内容を表す、もしくは命題を持つ動詞グループが挙げられる (Helbig/ Buscha 1991:171, Zifonun et al. 1997:1797)。(5) の *kennen* は知識内容を表す動詞であり、(5b) の例が示すように、このような動詞は受動化することが困難である。タイプ 2 は、*kosten*, *enthalten*, *gelten*, *umfassen*, *wiegen* などの金額・内容・量などの単位を表す動詞である (Helbig/ Buscha 1991: 171, Zifonun et al. 1997: 1796)。(6) の *kosten* は (6b) のように受動化することができない。<sup>4</sup> タイプ 3 には *bekommen*, *besitzen*, *erhalten*, *kriegen*, *schulden* など、所有関係を表す動詞 が挙げられる (Helbig/ Buscha 1991: 171,

---

<sup>4</sup> 先述のように Zifonun et al. (1997: 1796) は、次のように *messen* や *wiegen* が行為動詞として用いられる場合には受動形成が可能であると指摘している。

Zifonun et al. 1997: 1796)。 (7) の bekommen も受動化することができないとされる。タイプ 4 は sehen, fühlen, hören 等の不定詞句を伴う動詞、もしくは能動文の主語が動作主ではなく経験主をとる spüren, wahrnehmen などの動詞である (Helbig/ Buscha 1991:170f., Zifonun et al. 1997:1797)。タイプ 5 は再帰動詞である (Helbig/ Buscha 1991: 171, Zifonun et al. 1997: 1797)。 (9) や (10) のように、再帰代名詞を伴う動詞は受動化することができない。タイプ 6 として挙げられるのが、目的語が主語の身体部位および着衣の一部を表す場合である (Helbig/ Buscha 1991: 172, Zifonun et al. 1997: 1800)。 (11) のように目的語が sein Kopf のような主語の身体部位である場合、受動は困難とされる。それに対し主語以外の頭を指す場合は受動が可能となる (Der Kopf ... の例を参照)。ここでは主語と目的語の所属関係に受動の可否が関わっていることがわかる。タイプ 7 として、目的語が機能動詞と 1 つの密接な意味単位を形成する場合、受動形成が困難になるとされる。 (12) では Aufstellung nehmen という機能動詞が用いられているが、この場合受動は困難である。<sup>5</sup> 最後にタイプ 8 のように内的目的語 (inneres Objekt) を持つ場合においても、受動形成は基本的に不可能である。 (13) において、 einen schweren Kampf は kämpfen の内的目的語であるが、この場合受動は困難である。

### 2.3 先行研究の問題点

以上で受動の可否に関わる動詞の特性として、「動作主説」と「他動性説」の二つの立場を見てきた。また、受動形成が困難な動詞にはどのようなグループがあるかについてもこれまでの研究を概観した。ここで、それぞれの立場をとることによる問題点についてふれておきたい。

まず「動作主説」について考えてみたい。この立場に立つと、受動化できる動詞は動作主をとる動詞ということになる。しかし実際には、動作主の意味役割はないが受動化できる動詞が存在する。次の例を見てみたい。

- (14) a. Eine Schülerin sah den Täter.  
b. Der Täter wurde von einer Schülerin gesehen.

(14a) における sehen の主語の意味役割は経験主だと考えられる。それにも関わらずこの例は (14b) のように受動化が可能である。

---

<sup>5</sup> これに対し Zifonun et al. (1997: 1801) は、非人称受動においては次のように機能動詞の一部であっても、受動形成可能だとしている (Man stellte Überlegung an./ Überlegungen wurden angestellt.)。

また逆に動作主があり、そのため他動性もあると考えられるが、受動化できない動詞も存在する。

- (15) a. Thomas besucht München.  
b. \*München wird von Thomas besucht.

(15) の besuchen の主語の Thomas は動作主であると解釈できるが、(15b) のように受動は困難である。このように「動作主説」では解決できない例がある。

さらに「他動性説」においても同様に困難が生じる場合がある。次の例を見てみたい。

- (16) a. Die Wolkenkratzer überragen die Stadt.  
b. Die Stadt wird von den Wolkenkratzern überragt.

ここで Die Wolkenkratzer は動作主とは言えず、また überragen は状態的であり、他動性はないと考えられるが、(16b) のように受動が可能である。

以上の観察から、「動作主説」「他動性説」ともに、受動の可否を完全に説明できる一般化であるとは言いがたい。

また 2.2 で見たような受動を形成するのが難しい動詞についての記述にも不明な点がある。そこでは受動が困難な動詞として「思考や知識内容を表す動詞」や「金額・内容・量などの単位を表す動詞」など、意味的な基準による動詞のグループが見られるものがあるのに対し、「不定詞句を伴う動詞」や「再帰動詞」など、形態統語的な基準による動詞グループも存在している。受動の可否には意味的な基準と形態統語的な基準の両方が必要なのか、あるいはどちらか一方に還元することはできないのかという疑問が生じてくる。

### 3. 「場面レベル」述語と「個体レベル」述語

3章では「場面レベル」述語「個体レベル」述語の観点から、受動の可否について考察してみたい。まず「場面レベル」述語と「個体レベル」述語とはどのようなものかを確認しておく。「場面レベル」述語とは、ある時点またはある空間における事象を描写する述語である。「場面レベル」述語は一時性を示すため、ある特定の空間や時間をあらわす表現と共起可能である。反対に「個体レベル」述語は、個体の属性・性質・習慣などの恒常性、そして総称性を表す述語である。次の例を見てみたい。

- (17) a. Fast alle Flöhe haben ihn gebissen.  
b. Fast alle Flöhe haben ihn *in diesem Bett/ gestern Abend* gebissen.



- (18) a. Fast alle Lebewesen auf diesem Planet stammen von der Amöbe ab.  
b. \*Fast alle Lebewesen auf diesem Planet stammen *in diesem Region/ heute Abend* ab.  
(Kratzer 1995: 127)

(17) では、「ノミが彼を噛んだ」という行為がある特定の「場面」の切り取りとして表されており、場所や空間を表す副詞との共起も可能である。したがって、(17a) の述語は「場面レベル」述語だといえる。(18a) は「この惑星のほぼすべての生物はアメーバの系統をひく」という生物の一般的属性を表す言明であるため、ある時点や空間における「場面」の切り取りと見なすことは困難である。そのため (18b) のように場所や空間を表す副詞句との共起は不可能である。よって、(18a) の述語は「個体レベル」述語であるといえる。「場面レベル」述語と「個体レベル」述語は一般に以上のように区別される。

#### 4. 仮説と分析

この章では、3章で述べた「場面レベル」と「個体レベル」の観点から、以下の仮説の検証を行いたい。まず助動詞 *werden* と共起する過去分詞として現れる動詞に関しても、「場面レベル」動詞と「個体レベル」動詞に区別できると考えられる。<sup>6</sup> そして本稿では *werden* 受動という構文形式が、全体として「場面レベル」的解釈を生み出すのに寄与する形式であるという立場で考察してみたい。その場合、次のような仮説を導くことが可能である：

- I. *werden* 受動の形式が「場面レベル」的解釈を生み出す形式であるため、*werden* 受動は「個体レベル」性を持つ動詞との整合性が低い。
- II. 「個体レベル」的性質を持つ動詞で受動が可能な場合があるとすると、その動詞が *werden* 受動の形式に埋め込まれることで、その文は相対的に「場面レベル」的特性を示す。

ここでは *werden* 受動の形式が「場面レベル」的解釈と結びついていることを前提としているが、この前提を支持する根拠はあるだろうか。*werden* 受動の用例を観察すると、実際には次のように「個体レベル」的であると解釈できるような文も存在する。<sup>7</sup>

---

<sup>6</sup> 例えば受動文 „Sie wird von vielen gekannt.“ の場合、過去分詞で現れる動詞 *kennen* に関して「場面レベル」か「個体レベル」かの区別を行うことができる。*kennen* は「個体レベル」性（恒常性）を備えているため、基本的には「個体レベル」動詞と分類できる。

<sup>7</sup> これは Feilke (2012: 9) が「総称的受動 (generisches Passiv)」として挙げている例を一部改変したものである。

(19) In Österreich wird Steinsalz abgebaut.

この文はオーストリアでの習慣的属性が表されているように見える。しかしこのような総称的な文でもなお、場面レベル的な解釈が可能である。

(20) a. In Österreich wird *dieses Jahr* Steinsalz abgebaut.

b. *Es* wird in Österreich Steinsalz abgebaut.

(20a) では *dieses Jahr* という特定の時間を表す副詞が挿入され、「場面レベル」的な解釈が前景化していると言える。また (20b) のように同じく「場面レベル」述語と共起する *es* を挿入することも可能である。また意味的に考えても、(19) の文は完全に「個体レベル」的とはいえない面がある。すなわち主語である「岩塩 (Steinsalz)」は、オーストリアで採掘されるという属性を持っているわけではない。このことから *werden* 受動の形式は「個体レベル」的な読み込みがなされることもあるとはいえ、基本的には「場面レベル」的な解釈を基本とする形式と仮定することができる。このような観察を前提とし、以下では上記の二つの仮説を検証してみたい。

#### 4.1 werden 受動が不可とされる動詞

ここでは、*werden* 受動が「個体レベル」性をもつ動詞との整合性が低いという仮説から、上で述べた受動困難な動詞における「個体レベル」性の有無の検証を行う。まず、先ほどの受動の制限に関するタイプ 8 つのうち、タイプ 1 から 3 はこの仮説で説明可能である。<sup>8</sup>

(21) a. Er kennt die Welt.

b. \*Er kennt *in dieser Region/ heute Abend* die Welt.

c. \*Die Welt wird (von ihm) gekannt.

(22) a. Das Bier enthält 5 % Alkohol.

b. \*Das Bier enthält *in dieser Region/ heute Abend* 5% Alkohol.

c. \*5% Alkohol wird von dem Bier enthalten.

(23) a. Herr Meyer hat drei Kinder.

b. \*Herr Meyer hat *in der Ferienwohnung / heute Abend* drei Kinder.

c. \*Drei Kinder werden von Herrn Meyer gehabt.

---

<sup>8</sup> Kratzer (1995) によると、タイプ 1 の *kennen* や *wissen* などの動詞は、典型的な「個体レベル」述語として扱われている。

(21a) において、彼は「世の中を知っている」という性質をもち、通常彼はこの性質を失うことはない。よって、この文の述語である *kennen* は「個体レベル」述語であるといえる。この *kennen* は、ある時点や空間に縛られることはないために、時間や空間を表す表現を挿入した (21b) は非文となる。この場合、(21c) に見られるように、受動形成は不可能である。このように受動の助動詞 *werden* と共起する過去分詞の動詞特性が「個体レベル」的であれば、*werden* 受動の形成が困難になると考えることができる。タイプ 2 に関しても同様のことが言える。(22a) は、特定のビールに関して「5 パーセントのアルコールを含む」という性質を述べた文である。したがってこの場合も (22b) のように、時間や空間を表す副詞句とはまず共起しない。このような「個体レベル」的な性質をもつ動詞 *enthalten* は (22c) のようにやはり受動化が困難となる。タイプ 3 の所有関係を表す動詞グループに関しても、(23b) のように場所や時を表す副詞句を挿入すると非文になることから、属性や性質などを示す「個体レベル」的特徴が強いため、*werden* 受動と結びつきにくいと考えられる。

これと比較して「場面レベル」の他動詞では、以下の (24) や (25) のように空間や時間を表す副詞句と問題なく共起する。かつ受動形成は基本的に可能である。

- (24) a. Anna schlug *in der Schule/ heute Morgen* Taro.  
b. Taro wurde von Anna geschlagen.

- (25) a. Taro küsste *vor dem Haus/ heute Morgen* seinen Hund.  
b. Sein Hund wurde von Taro geküsst.

これまで紹介してきたタイプ 1 から 3 までの例をもとに、「個体レベル」動詞は *werden* 受動との整合性が低いという仮説 I の検証を試みたが、全てのタイプがこの仮説で説明できるわけではない。タイプ 4 から 8 は基本的に「場面レベル」的な特徴を持つ動詞だといえるが、上でみたように受動の形成は困難である。<sup>9</sup> タイプ 4 の不定詞を伴う動詞、タイプ 6 の目的語が身体部位となる動詞、タイプ 8 の内的目的語を持つ動詞は他の基準での説明が必要となる。<sup>10</sup>

<sup>9</sup> ただしタイプ 5 の再帰動詞とタイプ 7 の機能動詞は以下のように非人称 *werden* 受動を形成することができる：タイプ 5：Man bemühte sich, Gegenbeispiele zu finden.> Es wurde sich bemüht, Gegenbeispiele zu finden. タイプ 7：Man spielte Karten.> Es wurde Karten gespielt. (Plank 1993, Vater 1995)

<sup>10</sup> タイプ 5 の再帰動詞、タイプ 6 の目的語が身体部位である動詞に関しては、Straub (2009) がその受動の可否についての説明を試みている。Straub は主語と目的語との指示 (Referentialität) の観点から見て、主語と目的語が同一の個体を指示せず、別のものとして概念化されないと、受動が困難になると説明している。

## 4.2 werden 受動形成の可否に関して揺れのある動詞

この節では「個体レベル」性を持つ動詞が、werden 受動を形成しうる場合の例を見ていきたい。以上の仮説Ⅱでは、「個体レベル」性が高い動詞が、werden 受動を形成できる場合には、その動詞が「場面レベル」的に解釈されるのではないかと仮定した。ここでこの仮説の検証を試みたい。その際に kennen に注目して考察する。Zifonun et al. (1997), Beedham (2004), Duden (2009) においては、kennen は受動不可能な動詞に分類されている。しかし、マンハイムのドイツ語研究所 (IDS) の書き言葉コーパスで kennen の受動文が出現するかを調査したところ、約 200 件の例が見つかった。このことから kennen は受動形成が不可能とされる動詞の中でも、その可否に関して揺れのある動詞であるということがわかる。以下では、本来「個体レベル」性の高い動詞である kennen の受動文のコーパスの用例を分析することで、どのような場合に kennen が受動文を形成できるのかを考察する。

### 4.2.1 「場面レベル」述語と整合性の高い副詞句との共起

本稿の仮説に従えば、受動文で kennen が用いられるとすると、表されている出来事は「場面レベル」的であるということになる。その場合、「場面レベル」述語と整合性の高い副詞句と共起することが考えられる。そこで kennen が受動文で使われる際にそのような副詞句が出現するかを調査したところ、以下のような例が見つかった。

- (26) Ullmann: Wenn der eigene Name *plötzlich* von vielen **gekannt wird** - daran musste ich mich genauso gewöhnen wie daran, dass Jungs mich blöd finden, weil deren Freundin für mich schwärmt. (Hamburger Morgenpost, 08.03.2010, S. 42; "Das ist jetzt der perfekte Moment")

ウルマン: 自分の名前が多くの人に突然知られるようになると、そのことに私は慣れる必要があった。同様に若い男たちの女友達が私に夢中であるため、彼らが私のことを面白く思わないことにも。

- (27) Dass an den höheren Schulen etwa nach 1970 die deutsche Geschichte immer verbissener, wenn auch in guter Absicht, auf die Jahre zwischen 1933 und 1945 reduziert wurde, hat die Bekenntnisfreude gegenüber den besseren, älteren oder auch jüngeren Phasen der eigenen Tradition nicht gerade gestärkt - *oft werden* sie nicht einmal schemenhaft **gekannt**. (Der Spiegel, 22.12.2001, S. 50; Die unverschleierte Würde des Westens)

およそ 1970 年以降、高等学校ではドイツ歴史が、良かれとってのことにせよ、ますます頑なに 1933 年から 1945 年の時代に限定されてきたが、

そのことは自分自身の伝統のより良好な、以前もしくは最近の諸相に対して心を開く喜びを強化することにはつながらなかった。そういった諸相はしばしばお決まりの形で知られることすらない。

(26) の *kennen* の受動文では、急に起こるさまを表す副詞 *plötzlich* との共起が確認できる。*Plötzlich* は出来事の変化を前提とするため、意味的に「場面レベル」動詞との整合性が高い副詞であると考えられる。この例の *kennen* は「知られている」という「個体レベル」的な状態としての解釈はできず、あるきっかけにより「突然名前が知られる」という状態変化的な意味で使われている。ここでは *kennen* が「場面レベル」的解釈を受けているといえる。このように通常「個体レベル」的動詞と考えられる *kennen* も、ここで表されるような状態変化的な動詞解釈、すなわち「場面レベル」的解釈を受けるようなコンテクストでは受動が可能となる。(27) では受動文と頻度を表す副詞 *oft* との共起が見られる。*oft* は出来事が頻繁であることを表すため、出来事的な「場面レベル」動詞と整合性が高いと考えられる。そしてここでも *kennen* は単なる「知られている」という状態的な解釈はできず、「主語が知られる」という出来事が頻繁に起こることが表されている。この場合 *kennen* は「出来事」としての解釈が可能になっており、(27) の *kennen* は「場面レベル」的解釈を受ける。次の例もまた、*kennen* を「出来事」として捉えることができる例である。

(28) Die Polizei sucht nun Zeugen für die Attacke am 1. Oktober gegen drei Uhr morgens.

Der Vorfall war *erst gestern gekannt geworden*. (Nürnberger Nachrichten, 05.10.2006;)

警察は10月1日午前3時ごろに起きたその襲撃の目撃者を捜している。この事件は昨日になって初めて知られることとなった。

ここでは *kennen* が *erst gestern* という時間表現と共起している。そしてこの場合に受動が可能となっている。ここでは *kennen* は「知られる」という出来事と解釈され、その出来事が昨日になって初めて起きたという状態の変化が表されている。恒常性の高い「場面レベル」述語を伴う文では、このような状態変化の時点を表す副詞との共起は困難である。

以上の観察から、*kennen* が受動を形成する場合は、「場面レベル」性の高い副詞句との共起に見られるように、*kennen* が「場面レベル」的に解釈可能な場合であるといえる。

#### 4.2.2 「場面レベル」動詞との並列

「場面レベル」動詞との並列も、**kennen** が「場面レベル」的に解釈されていることの標識になりうる。並列接続詞 **und** は基本的に二つの文や語句を対等な関係で結ぶため、「場面レベル」動詞と並列接続語で結ばれている **kennen** もまた、「場面レベル」的な解釈が可能だと考えられる。以下はそのような例である。

(29) Ich möchte doch von anderen gesehen, gekannt und auch gefunden **werden**. (St. Galler Tagblatt, 30.06.2012, S. 55; Freunde: Facebook oder Face to face)

私は他人に見られたい、知られたい、そして見つけてもらいたい。

(30) Offensichtlich wollte sie als Dichterin nur von ihren Freunden **gekannt** und gelesen **werden**. (am Sonntag, 30.03.2003, S. 65; Magische weisse Welt: Im Hause der Emily Dickinson)

どうやら彼女は詩人としては友人たちにのみ知られ、作品を読まれることを望んでいたようだ。

(29) の **finden** は状態変化を表す動詞である。またこの箇所での「見つけられる」は一時的な行為であって、継続してなされるものではない。それゆえこの動詞はここでは「場面レベル」的に解釈される。したがってこの動詞と並列して現れている **kennen** も「場面レベル」的に解釈されると考えられる。(30) の **lesen** も典型的な「場面レベル」動詞である。したがって **lesen** と共起する **kennen** もまた「場面レベル」的解釈がなされるといえる。

#### 5. まとめと今後の課題

これまで本稿で明らかにしたことは、以下のようにまとめることができる。

- ・受動の形式が「場面レベル」性を生み出すため、その過去分詞の動詞が「個体レベル」動詞である場合、受動の形成が困難になる。
- ・助動詞 **werden** と共起する過去分詞の動詞が「個体レベル」動詞でありながら受動が可能な場合、その動詞は「場面レベル」的解釈が可能である。

以上の考察を通して、受動形成のメカニズム全てを明らかにできたわけではないが、これまでの研究と異なるアプローチで受動形成の可否に関する手掛かりが得られた。とはいえ本稿は、2章で紹介した「動作主説」や「他動性説」に対する仮説の優位性を示すものではなく、あくまで受動形成の可否に「場面レベル」や「個体レベル」が関わっていることを示唆するものである。

今回扱わなかった受動の可否において揺れのある動詞にも、この仮説が通用するのかを検証することが今後の課題である。

#### 参考文献・使用コーパス

- Bausewein, Karin (1990): *Akkusativobjekte, Akkusativobjektsätze und Objektsprädikate im Deutschen. Untersuchungen zu ihrer Syntax und Semantik*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- Beedham, Christopher (2004): *Language and Meaning. The structural creation of reality*. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins Publishing Company (=Studies in Functional and Structural Linguistics; 55).
- Dowty, David (1979): *Word meaning and Montague Grammar*. Dordrecht: Kluwer.
- Eisenberg, Peter (2006): *Der Satz: Grundriss der deutschen Grammatik*. Stuttgart: Metzler.
- Engel, Ulrich (1996): *Deutsche Grammatik 3., korrigierte Auflage*. Julius Groos Verlag Heidelberg cf.
- Eroms, Hans-Werner (2000): *Syntax der deutschen Sprache*. Berlin: de Gruyter 400-403.
- Feilke, Helmuth (2012): Bildungssprachliche kompetenzen – fördern und entwickeln. In: *Praxis Deutsch* 233, 4-13.
- Helbig, Gerhard/Buscha, Joachim (1991): *Deutsche Grammatik*: Leipzig :Verlag Enzyklopädie.
- Kratzer, Angelika (1995): Stage-level and individual-level predicates as inherent generics. In Carlson, G. N./ F. J. Pelletier (Hrsg.): *The Generic Book*. Chicago University Press, 125-175.
- Maienborn, Claudia (2000): Zustände – Stadien – stative Ausdrücke. Zur Semantik und Pragmatik von Kopula-Prädikativ-Konstruktionen. In: *Linguistische Berichte* 183, 271-307.
- Nicolay, Nathalie (2007): *Aktionsarten im Deutschen: Prozessualität und Stativität*. Tübingen: Niemeyer.
- Pape-Müller, Sabine (1980): *Textfunktionen des Passivs*. Tübingen: Niemeyer.
- Plank, Frans (1993): Peculiarities of passives of reflexives in German. In: *Studies in Language* 17, 135-167.
- Rapp, Irene (1997): *Partizipien und semantische Struktur. Zur passivischen Konstruktion mit dem 3. Status*. Tübingen: Stauffenburg.
- Staub, Margit Regina (2009): *Passiv und Transitivität im Deutschen. Der Weg von einem Zirkelschluss zu einem guten Kriterium für die Passivierbarkeit deutscher Verben*. Saarbrücken: VDM Verlag Dr. Müller

Vater, Heinz (1995): Zum Reflexiv-Passiv im Deutschen. In: Popp, Heidrun (Hrsg): *Deutsch als Fremdsprache. An den Quellen eines Faches. Festschrift für Gerhard Helbig zum 65. Geburtstag.* München: iudicium.

Wunderlich, Dieter (1997): Participle, Perfect and Passive in German. Theorie des Lexikons. Arbeiten des Sonderforschungsbereichs 282, Nr.99. Düsseldorf: Heinrich-Heine-Universität Düsseldorf.

Zifonun, Giesela et al. (1997): *Grammatik der deutschen Sprache.* 3 Bände. Berlin: de Gruyter.

Korpus: W-öffentlich-alle öffentlichen Korpora des Archivs W (mit Neuakquisitionen),  
Cosmas II web. Version 2.0, Institut für Deutsche Sprache.  
([http:// www. ids-mannheim.de/ cosmas2/](http://www.ids-mannheim.de/cosmas2/))





## シンポジウムの議論の内容とその成果

宮下 博幸

本叢書の基礎をなしている日本独文学会春季研究発表会のシンポジウムにおいては、当日多くの質問が寄せられ、活発な議論がなされた。ここではシンポジウムの議論の内容とその成果をまとめたい。その際、まず全体に関わるものに関して、いくつかのポイントに絞ってまとめ、その後に関々の発表に関する質疑応答に関して報告したい。その際にそれぞれの質疑応答に関して得られた成果についても述べたい。また最後に、本シンポジウム全体を通じて得られた成果をまとめたい。

まず本シンポジウムの根本に関わる「場面レベル(述語)」「個体レベル(述語)」という区分に関わる質疑について報告する。この点に関わる重要な質問としては、そもそも本シンポジウムが前提としている「場面レベル(述語)」「個体レベル(述語)」とは何かがよくわからない、そこでは文の主語が個体(individual)であるか否かが問題となるのかという趣旨の質問があった。これに対して、本シンポジウムでは両者の区別はその名称通り、「述語」の性質の2タイプと見なしていると答えた。ただし発表によっては述語の問題とは切り離して「場面レベル性」「個体レベル性」を問題にしているものもあり、確かにその点ではわかりにくい面があったことは否めない。このことを考慮し、本叢書では「場面レベル(述語)」「個体レベル(述語)」とは何かをより明確にすべく、導入の論稿を入れることとした。これは本シンポジウムの議論の成果であったといえる。

また「場面レベル」「個体レベル」という日本語の用語は、定着しているのか、場面レベルは通常「ステージレベル」と呼ばれるのではないかとこの質問があった。これに関しては本シンポジウムではそのように命名していると返答したが、これについて後に調べたところ、この分野の研究の第一人者である影山(2009)<sup>1</sup>も、本シンポジウムと同様の日本語の用語を使用していることがわかった。ここで改めて記しておきたい。

さらに本質的な質問として、「場面レベル述語」と「個体レベル述語」に本当に段階性はあるのか、単にどちらかに決まらない場合があるというだけで、段階性を仮定する必要はないのではないかとこの質問がなされた。これに対しては本シンポジウムの各発表がそれを示すことを目指しており、そこから判断していただくことになると述べた。しかし全体を見渡してみると、そのような主張が

---

<sup>1</sup> 影山太郎(2009)「言語の構造制約と叙述機能」『言語研究』136, 1-34.

はっきり示されていない部分も多くあったように思われる。そのため本叢書をまとめるにあたっては、各論稿においてその点ができるだけ明確になるよう努めたつもりである。これも本シンポジウムでの議論の成果だといえる。

さらなる本質的な質問としては、「場面レベル述語」「個体レベル述語」とはどのレベルを念頭に置いているのか、例えばある動詞だけを取り出して、それを「場面レベル述語」「個体レベル述語」と分けることは果たしてできるのか、むしろ **Kratzer** などが問題にしているのは、文として実現したとき述語の性質なのではないかというものがあつた。これはこれまでこの二項対立を扱った研究においても、必ずしも明確にされていなかった点であると考えられ、非常に重要な問題提起であつた。これに対しては、これまでの研究でも文脈から切り離れた述語を「場面レベル述語」「個体レベル述語」に分けている研究もあり、ある程度語彙レベルでデフォルトとして決まっている面もあると考えられるが、指摘のとおり、本来は文における実現のレベルで問題にされる述語の特性であると考えられると回答した。

また他の質問としては、**Kratzer** の挙げた例文（本叢書 4 頁の (4) 参照）がポリティカルコレクトネスの観点からして問題ではないかというものがあつた。これは確かにその通りであるが、**Kratzer** がそのように書いているので仕方ないと回答した。理論的な言語研究者はともすると例文で表される内容には関心が及ばないことがあるが、例として提示する文に関しても配慮する必要があることを改めて認識させられた質問であつた。

以上では「場面レベル述語」「個体レベル述語」の区別に関わる議論の内容について見たが、次に各発表に関わる質疑応答についても簡単に報告したい。

最初の坂賀・小川発表は「場面レベル」「個体レベル」の二項対立を名詞句にも拡大し、この対立が女性の指示対象を指す際の男性形使用とも関わることを主張するものであつた。具体的には **Professor** という名詞が女性を指すのは「個体レベル的」特徴を示す場合であると論じた。これに対して **Bundeskanzlerin** はそのような場合にも男性形は不可ではないかという質問があつた。これに関しては詳しい調査はしていなかったため、即答はできなかったが、本発表の主張からすると、定性が強い場合には男性形は不可だが、肩書的に用いられるときには男性形も出てくる可能性があるかと回答した。その後これについてインターネット検索を行ったところ、数件のみだが肩書の場合に **Bundeskanzler Merkel** という表現が確認できたことを付言しておきたい。

第二発表の和田発表は、一見対称性を示すと考えられる前綴り **vor-** と **hinter-** を伴う動詞、ならびに前綴り **ein-** と **aus-** を伴う動詞などを扱い、これらの動詞が対称的でなく、このペアのうちの後者を用いた文は、前者を用いた文に比べて、表されている出来事の「参照性」が低く、この点において「個体レベル」的な特徴とつながる面があることを示唆するものであつた。これに対し「参照性」

とは一体何を指しているのかという疑問が呈された。この質問に対しては、動詞意味に関連付けられている場所・方向への言及が「参照性」であり、本発表では「参照性」を「前置詞句+基礎動詞タイプ」、「二重不変化詞動詞」、「不変化詞動詞」に見られる相違を例に示したかったことを説明した。またなぜ不変化詞でない *hinter-* を *vor-* とペアとして扱っているのかという疑問も出された。これに対しては、空間意味の観点から *hinter* が *vor* の対称的なペアであるためと、それにも関わらず *vor-* とは非対称的な現れ方を示すため、比較対象として選んだことを説明した。またこれと関連して、分離性・非分離性を問うならば、*hinter-* の分離タイプも扱うべきではという質問もあったが、これに対しては *hinter-* の分離タイプはダイクシスの口語的用法であることから、それを扱わなかったと回答した。また *ein-/aus-* がどのようにして「場面レベル」「個体レベル」の区別に関わっているのかという質問もあったが、これに対してその場では十分に説明することができなかった。本叢書ではこの質問に対して回答を与えるべく、さらに考察を重ねたものとなっている。

第三の段上発表では、コーパスのデータ等に基づき、*be-*動詞にはその基礎動詞と比べて、「個体レベル」的な特徴が見られると論じた。これに対し、*be-*動詞は明らかに「場面レベル述語」であり、個体レベル的であるという意味がよくわからないとの指摘があった。これに関しては「場面レベル(述語)」と「個体レベル(述語)」の間に段階性はあるのかという問題に関わっており、本シンポジウムではそこに段階性があると考えて、*be-*動詞は基礎動詞に比べ、場面レベルの特徴と並んで、個体レベル的な特徴も表れていることを示そうとしたことを説明した。しかしこの立場は通常の「場面レベル述語」「個体レベル述語」の二項対立のかなり大幅な拡張的解釈を伴うものである。この質問を受け、本叢書の導入論文と個別の論稿で、本叢書の立場をより明確にするよう試みた。

第四の井口発表では、与格の名詞句の出現により、形容詞述語の場面レベル的な解釈が優勢となることを、主にコーパスデータに基づいて論じた。この発表に対しては、そこで扱った形容詞 *behilflich* に関して、発表ではこの形容詞を場面レベルとしているが、*Peter ist behilflich.* も場面レベル的だと言えるのかという質問があった。これに対しては *Dativ* がない場合には個体レベル的な解釈の可能性もあるが、*Dativ* があれば場面レベル的となると考えられると回答した。この点に関して、発表時は形容詞を場面レベルの形容詞または個体レベルの形容詞のどちらかに分類した上で議論を進めたが、本叢書の論稿では形容詞それ自身が場面レベルと個体レベルのどちらの性質を有しているかは問わず、与格の生起により述語の性質にどのような違いが生じているかに焦点を当てて論じたものとなっている。また発表では「場面レベル性」と「個体レベル性」の段階性を前提とし、扱った各形容詞をこの段階性の中に位置づける図を提示したが、これに対して、それぞれの形容詞がその位置におかれる根拠は何かという質問が

あった。これに対してはあくまで段階性があることを示すためのものであり、位置については今後の検討が必要であると回答した。

最後の武田・宮下発表では *werden* 受動が可能な動詞と可能でない動詞があることを出発点とし、*werden* 受動は「場面レベル」的な解釈を生み出すもので、それと整合する「場面レベル述語」的な動詞は受動化しやすく、整合しない「個体レベル述語」的な動詞は受動化しにくいのではないかという仮説に立って論じたものである。またこの仮説をさらに拡大し、通常受動が不可能とされる動詞も、「場面レベル」的なコンテクストでは受動が可能となるのではないかという前提に立って、この前提を支持する可能性のある例を考察した。これに対し、*werden* 受動が本当に「場面レベル」的な解釈を生み出すのか、例えば *München wird von vielen besucht.* のような例では、むしろ「個体レベル」的な解釈を生み出すこともあるのではないかという指摘を受けた。この質問に対しては議論の際には十分な回答を行うことはできなかったが、本叢書においてはこのような「総称的受動文」も「場面レベル」的な要素（例えば *heute*）を挿入することができ、典型的な「個体レベル述語」とは言えないことを示した。また、*kennen* が「場面レベル」的な特徴である場所や時間の副詞と共起する例に関して疑義が出されたが、これについてもその場では十分に答えることができなかった。この点に関しても本叢書の論稿ではコーパスデータをもとに、議論の補強を行っている。

以上で述べてきたように、本シンポジウムでは各発表がそれぞれ別の言語現象をもとに、「場面レベル述語」「個体レベル述語」という二項対立に新たな視点を提供することを目指したものであったが、その中で、この二項対立をもとに論じる際の課題や今後の展望が、ある程度はっきりした輪郭をもって見えてきたと思われる。これはシンポジウム全体の大きな成果だったと言える。今後、本シンポジウムで得られた知見をもとに、この二項対立、さらにはその言語現象における表れとその扱いについて、さらなる提案を行っていければと考えている。本シンポジウムはそのための重要な第一歩となった。

最後に本シンポジウムを聞きに来てくださった方々、質問や有益なコメントをいただいた方々に、シンポジウム登壇者一同、感謝を述べたい。

*Studienreihe der Japanischen Gesellschaft für Germanistik*

Nr. 131

Alle Rechte vorbehalten

©2018 Japanische Gesellschaft für Germanistik Tokyo

日本独文学会研究叢書 131号

2018年5月26日発行

ドイツ語の場面レベルと個体レベルの表現タイプ

編集 宮下 博幸

発行 日本独文学会

〒170-0005

東京都豊島区南大塚3-34-6-603

電話 03-5950-1147

メールフォーム <http://www.jgg.jp/mailform/buero/>

© 2018 日本独文学会

SrJGG

ISBN 978-4-908452-21-5